

## 序 章 研究の背景と目的、方法

伝統的な日本建築家屋には、縁側や深い軒が備わる。外部空間とも内部空間とも言えない空間は、屋内外両方の性質を持ち合わせ、その空間同士に連続性を生み出す中間領域と言える。現代では、伝統的日本建築家屋の減少に伴い、縁側や軒などの中間領域も消滅しつつあるなか、主に建築側より、中間領域の重要性について様々な研究、検証、取り組みが行われている。

庭側から見た場合、もっとも中間領域に近い場所に存在するのが沓脱石である。沓脱石も日本建築家屋の減少に伴い消滅しつつあるが、沓脱石は建築と庭の中間領域に存在し、二つの空間を繋ぐ動線を担い、内外の連続性を生み出す設えと言える。

しかし、管見の限り沓脱石に着目した先行研究はなく、まず沓脱石について言及している史資料において、絵図、名称、具体的な記述について調査を行った。

本論の調査に用いた史資料は、中世絵巻物 73 件、茶書含む造園古書 37 件、江戸期名所図会 18 件、『日本風俗画大成』に掲載されている風俗画や宗教画のほか<sup>1</sup>、屏風絵、浮世絵などである。また、調査の過程において、同じく沓脱に使用される設えとして、沓脱板と呼ばれる木製の踏板の存在が確認できたため、沓脱石と合わせて抽出し、表 1～3 に示すように一覧とした。

表 1 は、沓脱石の描写のある中世絵巻の一覧である。表 2 は、江戸期に刊行された名所図会における沓脱石の描写を示す。表 3 は、江戸期の茶書・造園書を中心に沓脱石に関する記述を示しており、調査した史資料のうち、主だったものを抜粋し表示している。

また、史資料では、単に「沓脱」と表記されている場合、現代住宅の玄関のように、履物を脱着する空間そのものを指す場合や、履物を脱ぐ動作、沓脱板を示すことがあることが分かった。そのため、表 4 では、調査した史資料の沓脱石、沓脱板の描写・記述・名称のほかに、単に「沓脱」と表記される場合も含め、時系列に整理した。なお、茶室前の沓脱石については、『岩波日本庭園辞典』の【沓脱石】の説明にある、「草庵風茶室の躡口では、ふつう沓脱石とは呼ばず踏石という。」<sup>2</sup>の説明に沿い、沓脱石と記述を分け、造園書と茶書は、記

述の有無に関わらず時系列に組み込んだ。

本論では、調査によって作成した一覧表をもとに、建築と庭園の中間領域における沓脱の設え全般に着目し、その変遷を明らかにした上で、建築との関係性を中心に、特徴の比較、考察を行う。

なお、本論では、時代に係わらず、木製の沓脱を沓脱板、石造の沓脱を沓脱石と記す。ただし、茶室・茶庭の沓脱石である場合は、躑躅踏段石と記す<sup>3</sup>。

## 第1章 史資料における沓脱の種類

序章で述べたように、本論では、沓脱石、沓脱板に関する調査として11世紀から20世紀中に成立した史資料を調査した。表4にて、躑躅踏段石を含む沓脱石の記載を確認すると、沓脱石の描写のある最も古い史資料は、正安元(1299)年の『一遍上人絵伝』であり<sup>4</sup>、具体的に言及している記述は、17世紀成立とされる『露地聴書』となる<sup>5</sup>。

一方、沓脱板の描写は、延久元(1069)年成立の『聖徳太子絵伝』にて確認でき<sup>6</sup>、具体的な記述も治承3(1179)年の『壬生家古文書』にて<sup>7</sup>、沓脱板という名称とともに確認できる。なお、「沓脱」という単語表記は、沓脱板よりも早く確認できるが、動作として、「沓(履物)を脱ぐ行為」のほか、『愚昧記』の嘉應2(1170)年の記録に見られる「沓脱板」を示す記述<sup>8</sup>、さらに、ある「一定の空間」を指している場合があることが分かった。よって第1章では、沓脱板、沓脱石ならびに躑躅踏段石、一定の空間を指す沓脱の出現状況を確認する。

### 第1節 沓脱板

表4に示したように、沓脱板の描写の初見は管見の範囲では、延久元(1069)年に成立の『聖徳太子絵伝』であり、図1で示すほか、合計5カ所にその姿が描かれている。またその名称は、治承3(1179)年の『壬生家古文書』にて「沓脱板一枚<長一丈一尺四寸半>」という記述が確認できる。

平安時代に木製の沓脱があることは既に上原敬二によって指摘されている。昭和33(1958)

年の『飛石・手水鉢』の沓脱石の節にて<sup>9</sup>、上原敬二は以下のように言及している。

「履脱石、沓解石とも書くが、石組園生八重垣伝には沓拔とあり、何れもクツヌギ石と訓む、また沓石とも一番石とも称している。＜中略＞このクツは昔の履物でわれわれの用いている靴とは違うが今日ではハキ物の総称と解してよい。家屋雑考には「簀子の内階の上へ平なる板を敷きおくなり、又階より一段低く設くるもあり、其造りさまざまと見えたり、東鑑、知家三条し、むかばきをつけながら南庭を得て直に沓解を昇り、ここにおいてむかばきをととき御座の傍らに参る云々などいふ事も見ゆ。」平安朝の頃はこれで見ると石ではなく板であったこともあり、簀子から渡廊下へ出る間にも沓脱があった。」<sup>10</sup>。

以上のように記しており、現在ではあまり目にしない沓脱板が平安時代には存在し、沓脱の設えとして使われていたということになる。

『壬生家古文書』では、「沓脱板一枚＜長一丈一尺四寸半＞」と記され、沓脱板の長さは凡そ 3.5m あったことが分かる。図 2 の『年中行事絵巻』においても<sup>11</sup>、中門廊側面に備わる沓脱板の幅は、建物柱間の 3 間よりも長く描かれており、なぜこれほどの幅が必要であったかは今後の課題として残る。

また、藤原実房の日記である『愚昧記』の嘉應二年正月二日の記録では、下記の通り、沓脱の上で沓を脱いだことが記されている。

「藤原経宗ト公事ヲ談ズ 二日、葵丑、未刻許左府亭、平宰相来會云＜中略＞右兵衛督於地脱沓、歸出之後、不復本列立妻戸前、修理大夫脱沓於沓脱上、歸出之後、手自取下沓、於地着之復本列、如何、左府云、脱沓於沓脱上、是常事也＜中略＞昇堂上之路ハ南階敷、經中門内敷、被命云、上藤南階敷＜略＞」。<sup>12</sup>

この記述から、左大臣、藤原経宗の屋敷は、南階を持つ寝殿造様式で、妻戸前に沓脱があることから、『年中行事絵巻』の描写と照らし合わせると、履物を脱着する沓脱板であったと確認できる。

以上のように、沓脱板の描写は、延久元（1069）年の『聖徳太子絵伝』、沓脱板という名称は、治承 3（1179）年の『壬生家古文書』にて確認できることから、次節にて詳細を示す

沓脱石よりも出現が早かった可能性が高い。しかし「沓脱板」の名称は、治承3年（1179）年の『壬生家古文書』以外では、確認できないことから、『愚昧記』の記述に見るように、沓脱板は単に沓脱と呼ばれていた可能性がうかがえる。

## 第2節 沓脱石・躑躅踏段石

続いて沓脱石について、本章冒頭に記述する通り、その描写がもっとも古く確認できる資料は、正安元（1299）年成立の『一遍上人絵伝』（以下『一遍絵伝』）であった。『一遍絵伝』では、合計8カ所に沓脱石と、同じく沓脱板も描かれており、沓脱石の描写があるもっとも古い資料と考えられる。しかし、沓脱石に関する具体的な記述は、先述した17世紀に成立とされる『露地聴書』に至るまで確認できず、その内容は、茶室の「にじり上がりの石」として扱っている。管見の限り、茶室ではない、沓脱石と判断できる記述は、享保10（1725）年に町名主からの提出書を地域ごとに一括、集書された『旧幕府引継書 江戸町方書上 浅草 上』の<sup>13</sup>、「伊豆磯などの石の踏段石」の一文である<sup>14</sup>。しかし、「沓脱石」という名称は用いられていない。

### 第1項 沓脱石

沓脱石という名称は、享保20（1735）年に北村援琴によって書かれた『築山庭造伝（前編）』にて確認できる<sup>15</sup>。上原敬二の『築山庭造伝前編 解説』では、客人島の解説にて、沓ではなく、履の字を用いて「此島に客拝石、対面石、履脱石、鷗宿石、水鳥岩などあり。」<sup>16</sup>と履脱石に（りだつせき・くつぬぎいし）仮名が添えられている。

これと同じ「履脱」を用いた表記はそれ以前の造園古書にも確認できる。時代が前後するが、応永2（1395）年の奥書が残る図3の『嵯峨流庭古法秘伝之書』「真の真体」図には<sup>17</sup>、履脱の文字が見られる。しかし、石の天端が平らでないことや、援琴のように明確に「履脱石」と「石」の表記をしていないことから、沓脱石であると特定できなかった。

同書をまとめたような形で書いたとされる『築山山水伝（或いは相阿弥築山山水伝）』では<sup>18</sup>、同様の絵図を用いて「対面石或ハ履脱（くつぬぎ）」と添え書きし、援琴と同様の解説

をしている<sup>19</sup>。同じく、寛政 11 (1799) 年の『夢窓流治庭』にも同様の記述が確認できる<sup>20</sup>。

江戸期では、援琴の『築山庭造伝 (前編)』より前に『余景作り庭の図』が刊行されており、沓脱石の描写が確認できるが、名称、記述に関して具体的な言及はされておらず<sup>21</sup>、次に沓脱石について記述している資料は、寛政 9 (1797) 年成立の東睦和尚の『築山染指録』であった<sup>22</sup>。

『築山染指録』では、絵図はないが、沓脱石について、「踏壇石是レヲ一ノ石ト云フ」<sup>23</sup>と「踏壇石」、「一ノ石」と記し、二の石、三の石と続き、三の石にて飛び石と同じ高さにするとされているが、沓脱石の名称は用いていない。

沓脱石という名称を用い、判別できる絵図に具体的な記述のある最も古い史資料は、管見の限り、文政 10 (1827) 年の『石組園生八重垣伝』であった<sup>24</sup>。秋里藩島は沓脱石について、座敷より踏初の石を沓抜であると記している<sup>25</sup>。

秋里は、沓脱石について、計 5 種の石組の据え方を図 4～8 のような絵図に下記のように、添え書きをしている。

まず、「飛石沓抜五ヶ之伝 (中之巻終之伝)」では、「心脚と組て心信といふ、是座敷より踏初とす、また是を沓抜といふ靈枝を不火といい…＜中略省略＞…九字能十字をしらふるとは一義の一心太極のいたる処なり」<sup>26</sup>とし、「本勝手定式飛石奥義」と表記している。心信は沓脱石のことで、秋里は真の沓脱石の形は二石組であると考えていたことが分かる。

次に「岩段沓抜組方」として、「定法之真の飛石を居るにおなし、飛石踏み初になる石を心信の二石を兼ねるの石を置くべし、真の飛石の形に略式を以て取扱ふとするべし。」<sup>27</sup>と二石の踏み初めの石 (沓脱石) の一方を飛石も兼ねる石とし、それに続く二番、三番の配石を示している。

続いて「横勝手踏段」では、「横勝手上り段は居間或は掃除伝ひ等の踏段に用ゆ、略式図のごとし。刀懸石之伝に二段石ともいふ、踏段の式、心信の二石を一石にて兼法なり、石の象に依て太極を置也。」<sup>28</sup>と記している。先述 2 つの方法では、二石としていた沓脱石を一石にする方法が記されている。

4 つ目の「真の履脱石 踏段石」では、「心信二石をもって真の沓ぬき踏だん石とす、勝手にしたがって左右の振様可心得、長三尺、幅壺尺貳寸、高さ八寸を定法とす」<sup>29</sup>と記され、履脱石の名称が確認できる<sup>30</sup>。前項の沓脱板の長さが凡そ 3.5mであったのに対し、同じ沓脱でありながら、それよりもはるかに長さが短いことが分かる。

最後に「略伝踏段」では、「略伝の法は一石にて心信の二石を兼る法なり、然ばまた重て次に心信の二石をおく、長三尺、幅壺尺貳寸、高さ六寸大小とも右の割合なり」<sup>31</sup>と、沓脱石が一石であった場合、それを補完するように、本来、沓脱石に当たると解釈できる「心信」として小ぶりの石を、重ねて二石置くことが記されている。真の履脱石との高さの異なる理由については、明確にならないが、どちらも縁の束を置くことが想定されている。

『石組園生八重垣伝』の沓脱石の名称をまとめると、飛石沓拔、岩段沓拔、横勝手踏段、真之履脱石、踏段石、沓ぬき踏だん石、略伝踏段となる。さらに、その翌年に刊行した『築山庭造伝（後編）』では<sup>32</sup>、「定式の沓脱踏磴」としている。沓脱石について秋里は、具体的な記述をしているものの、それぞれに異なる名称を用いており、統一した沓脱石という名称ではなかったことが分かる。

しかし、『石組園生八重垣伝』と同年に刊行された鼻山人の人情本『珍説豹の巻』<sup>33</sup>では、「小松原の履脱石を据ゑ」という一文、天保 5（1834）年の『恩愛二葉草』では「此方は土間の上り口、沓脱石も本町場…」と記され<sup>34</sup>、履脱石・沓脱石と確認できることから、江戸末期になるにつれ、名称が統一されつつあったのではないかと考えられる。

古くは、正安元（1299）年の『一遍絵伝』にて、その姿を確認できる沓脱石は、沓脱のための石であると認知はされていたが、江戸末期まで沓脱石という名称が定まっておらず、史資料の記述から、「踏段石」や「一ノ石」など、別の名称であった可能性が高いことがうかがえ、今後の調査の課題となる。

## 第 2 項 躑躅踏段石

続いて、沓脱石である茶室建築の内部に上がるための踏段、躑躅踏段石について触れる。これまで、表 4 に示す通り、建保 2（1214）年の栄西による『喫茶養生記』<sup>35</sup>、14 世紀から

15 世紀に書かれたとされる『喫茶往来』<sup>36</sup>、天正年間（1573-1592）成立とされる『烏鼠集』<sup>37</sup>、天正 14（1586）年の『山上宗二記』<sup>38, 39</sup>、千利休が目通しを行ったとされる『南坊録』などを調査したが<sup>40, 41</sup>、躡揚踏段石について描写、名称、記述は共に確認できなかった。

躡揚踏段石とは、秋里藤島の『築山庭造伝（後編）』にて記されている表記であり、図 9 に示すように「定式茶庭全図」にて、描写も確認できる。

さらに、前述した、『露地聴書』では、「にじり上がりの石は両足ふみ揃えて上がる程の上平らかに恰好よき石を居べし、＜中略＞にじり上り敷居の上端より石の面まで一尺二寸斗にすべし、兎に角上り下り自由なるを本位として、＜中略＞はばき板よりは石の間六寸ばかり明て草履立て、＜中略＞石の上迄高さ四寸也」<sup>42</sup>と大きさ、据え方、寸法、さらには、次の石と言われる「おとし石」、「のり石」と続き、飛石に接続することが記述される。また、元禄 14（1694）年成立とされる『古今茶道全書』でも、絵図にその姿が確認できるほか<sup>43</sup>、<sup>44</sup>、名称については、元和 6（1620）年から以降 50 年間に記されたと推定されている『茶譜』にて下記のように記されている<sup>45</sup>。

「一 利休流ニ小座敷へ入口ヲクハリト云、右宗旦曰、クハリト云能名ノ有之ニ、当代之ヲ踏（ニシリ）アガリト云、賤言葉ト云云。右踏（ニシリ）上ト云コト、古田織部時代ニ大工ノ云初シヲ、其以後之ヲ云触テ歴々ノ仁モ踏（ニシリ）上ト云、誤也、」<sup>46</sup>。

つまり、古田織部の時代に大工により、踏（ニシリ）上と言われるようになったとされているが、当代が踏（ニシリ）アガリと言ったことを強調している。

茶書については、今後さらなる調査を要すが、これまでの調査から、『嵯峨流庭古法秘伝』の「履脱」の表記を沓脱石ではないとすると、『露地聴書』に記される「にじり上がりの石」、『茶譜』の「踏（ニシリ）上」とされる躡揚踏段石は、躡口に上がるための踏み石だという認識が名称に反映され、沓脱石よりも早い段階で名称が定まっていたことがうかがえる。

### 第 3 節 空間を示す沓脱

前節まで、沓脱板と沓脱石について触れたが、本節では、空間を示す「沓脱」について記

す。表4で示すように、「沓脱」という単語表記は11世紀から16世紀までの史資料で特に目立って確認できる。同一期間において、沓脱板と沓脱石の描写も確認できる。しかし、前節にて記した通り、沓脱石の名称は確認できず、沓脱板という名称も『壬生家古文書』の1件のみである。つまり、この期間において、単に「沓脱」と表記される場合、沓脱板、沓脱石のどちらかを指していたと考えられる。

表4の描写数や記事の数からみれば、「沓脱」と表記される場合、古代、中世では主に、沓脱板を示し、近世では沓脱石を主に示していた可能性がうかがえる。

江戸末期の『桂御別業之記』では<sup>47</sup>、「前に名高き遠州好みの真の飛石なり、御椽の昇り口は大なる石あり、六人の沓を並ぶへし故の遠州好みの真の飛石六つの沓脱という」<sup>48</sup>と沓脱石を沓脱と表記している。しかし、ここで挙げた沓脱以外にも一定の空間自体を沓脱と呼ぶことがあったと考える。

虎明本狂言にある『芒芒頭』（別名『菊の花』）では<sup>49</sup>、上臈に声を掛けられた丁稚が、祇園松原に連れて行かれ「一の上座に通された」と主人に報告する内容となっている。この狂言の確かな成立年代は不明であり、室町末期から近世初期に掛けての成立とされているが、舞台が祇園松原であることから、凡そ江戸時代以降のことだと推定される。

丁稚から、周りに緒太の金剛がたくさんあったことを聞いた主人は「そこは沓脱といふて一の下座じゃ」と答えるやり取りがあり<sup>50</sup>、履物を脱ぐ場、その空間を指して「沓脱」と言っていると考えられる<sup>51</sup>。

つまり、「沓脱」と表記される場合、時代、扱う者によって、沓脱石、沓脱板、空間を示していることが分かる。

## 第2章 中世絵巻に描かれた沓脱石・沓脱板—『一遍上人絵伝』を中心に—

第1章では、沓脱板、沓脱石、茶室への踏段としての躑躅踏段石、空間としての沓脱について、それぞれの描写・絵図、名称、具体的記述に関する初見と内容を確認した。



沓脱板の名称は、治承3（1179）年の『壬生家古文書』にて、描写は延久元（1069）年の『聖徳太子絵伝』にて確認できる。一方、沓脱石は、正安元（1299）年の『一遍絵伝』にて描写が確認できるものの、沓脱石という名称は江戸末期にならないと確認できず、しかも19世紀末に至っても統一した名称は用いていない。沓脱石という名称が定着する以前では、「踏段石」や「一ノ石」など別の名称があったとした。さらに、各史資料を見る限り、沓脱石に関する名称や記述に比べ、茶室前の沓脱石、すなわち躑躅踏段石については、それよりも早くから躑躅口に上がるための踏み石であるという認識があり、名称にも反映されていることを確認できる。また、江戸期以前の史資料にて、「沓脱」と単語表記される場合は、特に沓脱板を示し、江戸期以降では沓脱石を示すようになった可能性があるとした。

第2章では、最も古く沓脱石の描画がある『一遍絵伝』を中心に、沓脱石ならびに沓脱板が据えられている状況を明らかにした上で、12世紀の『年中行事絵巻』と14世紀初めに成立した『春日権現験記絵』<sup>52</sup>における沓脱板の使われ方について検証する。

## 第1節 沓脱石の描写がある中世絵巻

『一遍絵伝』では、合計8カ所に建築への踏み段と見られる沓脱石の描写を確認できる。このうち、三島大社前の小庵、備前国藤井の政所の邸、軽部の里（教願の房）、下野の国小野寺境内の画面では、実際に履物を脱ぎ置いてある様が描かれていることから、履物を脱ぎ、屋内に上がるための設えだとわかる。表4に示す通り、『一遍絵伝』以外にも、1307（徳治2）年成立の『法然上人絵伝』<sup>53</sup>、観応2（1351）年『慕帰絵詞』<sup>54</sup>、応安元年-慶応元（1374-1389）年『弘法大師行状絵詞』<sup>55</sup>、14世紀初成立『志度寺縁起絵』<sup>56</sup>、正和3年（1314）成立『融通念仏縁起絵巻』<sup>57</sup>、応永32（1425）年成立『平治物語絵巻（常盤巻）』<sup>58</sup>、15世紀初成立『福富草紙』<sup>59</sup>、同じく『芦引絵』などの中世絵巻物において<sup>60</sup>、沓脱石の描写を確認できる。

現在、日本仏教十三宗のひとつに数えられる「時宗」の宗祖である一遍は、延応元（1239）年に伊予国（現、愛媛県）に勢力を持った河野家に生まれた。武家に生まれた一遍であった

が、浄土宗西山義祖證空（1177-1247）の門下で、大宰府の聖達（生没不詳）に入門することで仏門に入った。その後、肥前国の證空門下の華台（生没不詳）のもとで、浄土教の基礎を約1年間学び、再び聖達のもとに戻り、父である河野通広の死によって伊予に帰国することになる弘長3（1263）年まで、その下で学んだ。伊予に帰国した一遍は、この後、文永11（1274）年に、所有していたすべての財産を放棄し、遊行の旅を開始する<sup>61</sup>。

『一遍絵伝』は、こうした一遍の生涯の遊行を通じた布教活動を、上人が没した10周忌の祥月命日である8月23日に、聖戒が記し終えたことが奥書に書かれている。

絵巻の制作に当たっては、その没後、聖戒が旧跡を遍歴しながら、行状記の詞藻を綴ったとしており、随行した法眼円伊は、鮮やかな顔料を多用する大和絵様式を基調としつつ、当時は最先端であった水墨画の技法を取り入れている。そのため、遊行の旅路となった各地の風景や、そこに生きる人々の姿が細密に、情緒豊かに描き出されており、中世当時の全国各地の状況を知る上でも貴重な史料であるとされる<sup>62</sup>。

一遍の事跡を絵巻にしたものは、二系統の分類が立てられているが、本論では、聖戒本を用いて検証を行っている。

## 第2節 『一遍上人絵伝』に描かれた沓脱石

先にも述べたように『一遍絵伝』では、全6場面、合計8石の沓脱石の描写を確認できる。絵巻物の構成順に沿って見ていくと、まずその姿を確認できるのは、15歳で故郷の伊予を出立し、聖達、華台上人に14年間の師事を受けたのちに伊予に戻った一遍が、文永8（1271）年に再出家を志し最初に立ち寄った信州善光寺境内である。

善光寺の画面では、計3石の沓脱石が描かれており、1つ目は、図10に示すように、善光寺の南大門を入ったところにある僧房と思われる板屋の正面中央に、縁側に沿って長方形の石が置かれている。さらに、この建物から視線を画面左に向けた木々の間に建つ建物の正面に図11の通り、2つ目の沓脱石を確認できる。この建物は、全体が描かれていないため、全容を把握することはできないが、1つ目と同じく、建物正面に縁側のようなものが備

わり、それに沿う形で長方形の石が据えられている。

3 つ目の沓脱石は、図 12 で示すように、善光寺の築地を出た建物の正面に据わる姿を確認できる。柴木で囲われた敷地には、計 3 棟の建物があり、沓脱石は母屋と思われる茅葺屋根に板造りの軒を設けた建物の入口に据えられている。据えられている石は、前述の 2 か所と同様に長方形をしているが、縁側は描かれていない。善光寺に描かれた沓脱石の上には、履物の描写がないことから沓脱であるとは断言できないが、いずれも建物の正面に据えられている。

『一遍絵伝』にて、善光寺に続き、沓脱石が描かれている場面は、筑前を遊行する一遍が立ち寄った図 13 の大隅正八幡宮拝殿の画面である。

現在の鹿児島神宮の 13 世紀の様子は、檜皮葺に朱塗りの欄干が付いた階のある本殿と、檜皮葺ながらも簡素な造りをした拝殿のみであったことが分かるが、この拝殿の廻縁に座し、合掌をしている一遍の後方には、長方形の沓脱石が据えられている。

続いて一遍が訪れた図 14 の備前国藤井の政所邸にて、履物が置かれている沓脱石を確認できる。吉備津神社の子息の屋敷とされるこの建物は、屋根は板葺きながらも、廻縁が備わり、周囲を網代垣で囲われた整備の行き届いた住宅であることが分かる。屋内は畳のようなものが敷き詰められているようにも見えるが、ほかの中世絵巻の畳の描写と異なり、畳の厚みが描かれていないことから、畳の表のみを敷いた薄縁だと考えられる。

またこの画面では、これまでの 4 か所の沓脱石が建物正面に据えられていたのに対し、庭側に沓脱石を用いている。

その後、一遍一行は、奥州平泉に向けて北上する。6 つ目の沓脱石は、その道中に立ち寄った図 15 の下野國小野寺（現：大慈寺）にて確認できる。突然の雨に打たれた一行が、楼門前に建つ板屋に駆け込む様が描かれている画面だが、その板屋の前に履物が脱ぎ散らかされた沓脱石が描かれる。この建物にも縁側が備わり、これに沿うように長方形の沓脱石が据えられているが、柱間口を見る限り中央を避け、左に寄せた場所に据えられている。

履物のある沓脱石の様子は、図 16 の三島社（現：静岡県三島大社）の画面でも確認でき

る。三島社の鳥居前の街道を挟んだ小さな板屋に備わった縁に沿って、履物が置かれる長方形の沓脱石が描かれている。

8つ目の沓脱石は、現在の倉敷市の北に当たる軽部の里にある教願の住房にて確認できる。臨終に際し訪れた一遍が描かれているが、図 17 で示すように、板屋に備わる縁側に沿って長方形の沓脱石が据えられ、草鞋類と思われる履物が置かれている。この住房には、畳が敷き詰められているが、家主の教願が病床にあることから畳が常設されていたかは定かではないが、沓脱石が据えられている方向には、道があり、据えられる場所が建物の正面だということが分かる。

以上、全 6 画面、合計 8 石が、『一遍絵伝』に描かれた沓脱石の描写であり、その姿を確認することができる最も古い史資料であると言える。

### 第 3 節 沓脱板と動線の変化

第 2 節では、『一遍絵伝』に描かれた沓脱石を見てきたが、本節では、沓脱板の描写について確認する。

『一遍絵伝』には、沓脱板の上で履物を脱ぐ様子は描かれていないが、図 18 の『慕帰絵』には、その上で履物を脱ぎ屋内に入る様が描かれており、沓脱石と同様に、この上で履物を脱着する際に用いられていたことが分かる。

『一遍絵伝』において沓脱板は、図 19 の肥前国華台上人の僧坊前、図 20 の太宰府聖達上人邸、図 21 の京都因幡堂街道を挟んだ屋敷、図 22 の信濃佐久小田切の里武士の館、図 23 の佐久郡大井太郎邸、図 24 尾張国甚目寺本堂、図 25 の兵庫加古川市野口教信寺、図 26 の奈良当麻寺曼荼羅堂前の合計 8 カ所に見ることができる。描写の大きな違いは、沓脱石の描写とは異なり、容易に判別ができるほど鮮明に描かれている。

沓脱板は、『一遍絵伝』よりも早い成立の『年中行事絵巻』(12 世紀)でも確認できるが、図 2 のように巻三の、闘鶏・蹴鞠の貴族の邸では、東中門廊前に沓脱板が描かれ、さらに侍廊入口にも沓脱板が備わる。藤田盟児の「日本の住宅建築における空間的發展」によれば<sup>63</sup>、

12 世紀の寝殿造において、身分が最も高い位の者の正式な動線は中門を入り、南庭を経て南寝殿階（御階）から昇殿する動線であったとされる。さらに、階は使用できないが、上位の身分にある貴族は、中門廊南側に据えられた沓脱板から上がり、中門廊、透渡殿を経て寝殿に入るとされ、図 27 に見られる西中門廊の南側に確認できる沓脱板が東中門廊にも備わっていたと分かる。藤田によると、図 2 に描かれる中門廊前の沓脱板ならびに侍廊前の沓脱板は、それぞれ中位の者、下位の出入口であるとされ、寝殿造では、身分によって個々に出入口が定められていたとしている。

しかし、平安末期から鎌倉期になり寝殿の東西の対を欠く様式が増えると、図 28 の『春日権現験記絵』のように、唐破風が設けられた中門廊側面の妻戸が、最も身分が高い位の者の入口となったとされる。藤原俊盛の邸は、図 29 のように東西の対を欠き、南階と中門廊南側の沓脱板も姿を消し、その前に備わる沓脱板がそうした身分にある者の昇降装置となっている。平安から中世において、寝殿に昇る行為は重要な意味があったこととされるが<sup>64</sup>、南階の担っていた役割が、鎌倉期になると沓脱板に移行されたという見方もでき、どういった背景、また意味があったのか、その有無も含め、今後の調査によって明らかにしたい。

### 第 3 章 『一遍上人絵伝』における沓脱板・沓脱石に関する一考察

第 2 章では、『一遍絵伝』に描かれている合計 8 石の沓脱石ならびに沓脱板について、据えられている状況を示した。『一遍絵伝』において沓脱石と沓脱板には、単純に描写の鮮明さ（大きさ）の違いがあることから、沓脱板の利用の変遷について、『年中行事絵巻』と『春日権現験記絵』の比較検証を行った。これにより、前者が描かれた 12 世紀では、最も身分が高い位の者の正式な動線であった南階が、14 世紀の後者では姿を消し、代わりに唐破風の付いた中門廊前の沓脱板に移行されたことに触れた。また、このことから、沓脱板が階の後継を担っていた可能性があることを指摘した。その上で、第三章では、『一遍絵伝』に描かれる沓脱石、沓脱板について、共通性の有無を確認し、沓脱石と沓脱板の備わる建物の規模について考察を試みる。

まず、『一遍絵伝』に描かれる沓脱石の共通点は、全てが長方形の石であることが挙げられる。次に据えられている建物の外観を見てみると、全容が確認できない図 11 を除く、ほか 7 棟の建物の屋根は、図 13 の「大隅正八幡宮の拝殿」は檜皮葺、図 12 の「善光寺外の建物」が茅葺と板葺の合わせである他、残る 5 カ所については板葺である。

また、同じく、図 12 の「善光寺外の建物」以外の 7 カ所には縁側が付いており、図 16 の「三島社鳥居前の小屋」以外は廻縁であることが確認できる。

沓脱石が据えられている場所は、図 14 の「吉備津神社子息の邸」以外は、建物の正面に据わっているが、その場所は中央であったり、片側に寄ったりと統一性は見られない。

さらに屋内は確認できる 6 カ所のうち、図 12 「善光寺外の建物」、図 15 「小野寺前の板屋」、図 13 「大隅正八幡宮の拝殿」、図 16 「三島社鳥居前の小屋」は板敷きであり、図 14 「吉備津神社子息の邸」は薄縁、図 17 「教願の住房」は畳が敷かれている。

以上のことから、『一遍絵伝』の沓脱石と据えられている建物に関して、建物内部と外部の中間領域に据えられていること、形が長方形であること以外に、大きな共通点はないと言える。

しかし、沓脱板のある建物と比較してみると、沓脱石が据えられている建物の規模は、「善光寺外の建物」以外は全て 2 間×3 間程度であることがわかる。逆に沓脱板の備わる建物規模は、「肥前国華台上人の僧坊」は、3 間×3 間程度であるが、他は 4~5 間口であり、沓脱石のある建物は、沓脱板の備わる建物に比べ小規模で、施設の中心となる本堂や金堂などの建物には、沓脱石は据えられていないと言える。また、沓脱板のある建物では、確認のできない図 21 の「因幡堂街道を挟んだ邸」を除くと、全てに廻縁が備わり、さらに、図 22 「小田切の里武士の館」を除く、その他 6 画面の施設には檜皮葺の建物があり、破風飾りもされている。沓脱石のある建物の屋根は、ほとんどが板葺であることを考えると対症的であるという見方ができる。

「住み主の階層と建物の規模」において<sup>65</sup>、小泉和子は、絵巻物に描かれた建物を識別する方法を記しているが、その判断基準の前提として建築内部の土間の有無を確認すること

としている。『一遍絵伝』の沓脱板の備わる建物については、建築内部を確認することが困難である。しかし、敢えて小泉が示す外観から判別できる指標として挙げている「大規模で正規の寝殿造」は、屋根が檜皮葺であることに注目すると、『一遍絵伝』における沓脱板のある建物の特徴であると捉えることができる。沓脱石の備わる建物でも「大隅正八幡宮の拝殿」は檜皮葺であるので、検討の余地は残るが、小泉の指標通りであれば、沓脱板の備わる建物の多くが寝殿造の影響を受けている可能性が生じる。

比較的屋根が確認できる中世絵巻の『法然上人絵伝』では、沓脱板が 51 カ所に描かれている。そのうち屋根が確認できるのは 44 カ所だが、25 棟の建物は檜皮葺の屋根を有している。しかし、8 カ所の沓脱石の描写の内、檜皮葺の屋根であったのは、図 30 の「明禅の住居」のみであり、『一遍絵伝』と同じ傾向にあると言える。

『一遍絵伝』が描かれた時期は建築様式の過渡期に当たり、一概に寝殿造の別を分類することが難しいが<sup>66</sup>、沓脱石の備わる建物は寝殿造の系統にはなく、反対に沓脱板の備わる建物は寝殿造の系統にある可能性について、今後の調査にて明らかにする必要があると考える。

## 結章 史資料における沓脱の特徴

本論では、建築の内外を繋ぐ昇降設備として用いられてきた沓脱板と沓脱石について、描写、名称とその具体的な記述について史資料を調査し、表 4 の通り一覧に整理した。

まず、描写について、もっとも古くその姿が確認できる史資料は、沓脱板が、延久元(1069)年の『聖徳太子絵伝』であり、沓脱石は、正安元(1299)年の『一遍絵伝』であることを明らかにした。

また、それぞれの名称について、沓脱板は、治承 3(1179)年の『壬生家古文書』にて確認でき、江戸期以前の史資料で、単に「沓脱」と称する場合、沓脱板を示すことがあるということを確認した。一方で、沓脱石という名称は、享保 20(1735)年に北村援琴によって書かれた『築山庭造伝(前編)』にて確認することができるが、参照したとされる『嵯峨流庭

古法秘伝之書』の「真の真体」図を確認すると、「対面・履脱」と記されるのみで、隣り合う「客拝石」や「礼拝石」のように「石」であるとは明記されておらず、描かれている石の天端も平らでないことから、建築に上がるために、履物を脱着する沓脱石ではない可能性を指摘した。

昇降装置であることが分かる沓脱石という名称が確認できる史資料は、文政 10（1827）年に刊行された造園書『石組園生八重垣伝』、同年の人情本の『珍説豹の巻』であり、沓脱板の方が沓脱石よりも出現が早かった可能性を見出した。

しかし、『石組園生八重垣伝』においても、沓脱石という名称に統一はされておらず、造園書で扱っていることから庭の設えとして存在していたが、それ以前は、「踏段石」、「一ノ石」など別の名称であったことを確認した。ただし、それよりも古く、同じく石造の沓脱である茶室前の躡揚踏段石について、『露地聴書』や『茶譜』にて、茶室建築の躡り口に上がるための石であることが認識されていたことが分かる「にじり上がりの石」などの名称が確認でき、茶書では沓脱の役割を果たす石として、扱われていたことを見出した。

また、表 4 で示す通り、江戸期を境に、沓脱板と沓脱石の史資料における描写数が反転する。江戸期以前の史資料では、沓脱板の描写数は 163 カ所あるのに対し、沓脱石は 31 カ所に留まり、躡揚踏段石に関する描写、記述はともに確認できない。しかし、江戸期になると、沓脱板の描写数は 19 カ所に留まり、一方で、沓脱石の描写数は 200 件に及び、さらに数は少ないが、躡揚踏段石の姿が確認できるようになる。つまり、沓脱の設えの主流は、平安期から室町期では沓脱板であったが、江戸期になると数を減らし、代わりに沓脱石が沓脱の主流になったという可能性を示すことができる。

今後は、第 3 章の考察で示したように、検証する必要があるとした沓脱板が寝殿造の系統にある建物から誕生した可能性について調査した上で、沓脱石は、それよりも小規模な建物に限って据えられていることから、各建築種における沓脱石との関りを明らかにすることが重要であると考えらる。

特に茶室については、調査が十分でないこともあるが、茶書の記述から、沓脱石の変遷を



明らかにする上で係わりがあることが伺える。

今後は、『一遍絵伝』にて沓脱石が備わる建物が小規模であったことを踏まえ、民家に系統を持つと考えられる茶室<sup>67</sup>、茶事との関り、ならびに「境」や「間」の空間に対する民間習俗、原始的信仰について検証するとともに、履物に対する扱いと信仰を調査したうえで、沓脱石の変遷を明らかにし、庭側から中間領域の重要性について言及していきたい。

(文字数 13981 文字)

＜注釈・参考文献＞

- <sup>1</sup> 安田靫彦『日本風俗書大成』中央美術社、1929年。
- <sup>2</sup> 小野健吉『岩波 日本庭園辞典』岩波書店、2004年、p. 87。
- <sup>3</sup> 躑躅踏段石の名称は、秋里離島が『築山庭造伝（後編）』文政11（1828）年に用いている名称である。同書内で秋里は、「これは定式の沓脱踏磴」という文言を用い、明確に茶室の沓脱石と庭の沓脱石を区別した記述が確認できる。
- <sup>4</sup> 小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人絵伝』中央公論社、1978年
- <sup>5</sup> 上原敬二『解説南坊録・露地聴書』加島書店、1983（昭和58）。
- <sup>6</sup> 菊竹淳一『日本の美術91 聖徳太子絵伝』至文堂、1973年。
- <sup>7</sup> 『壬生家古文書』治承3（1179）年。東京大学史料編纂所データベース  
HP <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/> （2020年9月9日閲覧）。
- <sup>8</sup> 『愚昧記』東京大学史料編纂所データベース  
HP <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/> （2020年9月9日閲覧）。
- <sup>9</sup> 上原敬二『飛石・手水鉢』加島書店、1958（昭和33）。
- <sup>10</sup> 上原敬二前掲書（9） pp. 3-4。
- <sup>11</sup> 『小松茂美『日本絵巻大成8 年中行事絵巻』中央公論社、1977年。
- <sup>12</sup> 『愚昧記』東京大学史料編纂所データベース  
HP <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/> （2020年9月9日閲覧）、253画。
- <sup>13</sup> 林陸朗・朝倉治彦・長谷川正次編、小森隆吉・寺田登校注『旧幕府引継書 江戸町方書上 浅草 上』新人物往来社、1987年。
- <sup>14</sup> 林陸朗・朝倉治彦・長谷川正次編（13） p. 581。
- <sup>15</sup> 上原敬二『築山庭造伝前編解説』加島書店、1989年。
- <sup>16</sup> 上原敬二前掲書（15） p. 26。  
＜以下、本文より転載＞  
「山水の両の端に必二島あり、端近くある島を客人島といふなり。此島に客拜石、対面石、履脱石（＜右仮名＞：りだつせき・＜左仮名＞：くつぬぎいし）、鷗宿石、水鳥岩などがあり。」※＜＞内は加筆。  
【解説】島といっても半島をさしている。次の主人島とともに庭のなかでは大切な一つの地割として尊重された時代があった。客人・主人とは利用する人の名称ではなく池のなかに相対して左右から出張っている半島の状態を相対的にかく呼んだだけのもの、一つの手法の名称である。この島にもいくつか石が配置されているが、これは前項滝口や川すとの配石とは違う性質のものである。滝口の場合は水の流れに相応してそうした石が存在することはいかにも自然であると見なされる。しかし客人島や次の主人島の石はそうした意味がなく、全く人為的であり、多少は半島とか地形に合わせたものもないではないがまず多くは人の考えで定まる。
- <sup>17</sup> 上原敬二『解説余景作り庭の図・他三古書』加島書店、1975年、p. 58。
- <sup>18</sup> 上原敬二前掲書（17）。
- <sup>19</sup> 上原敬二前掲書（17） p. 69。
- <sup>20</sup> 上原敬二前掲書（17） p. 88。
- <sup>21</sup> 上原敬二前掲書（17） pp. 1-45。
- <sup>22</sup> 庭園古書刊行会『築山染指録』大原出版企画、1975年。
- <sup>23</sup> 前掲書（22）下巻部。
- <sup>24</sup> 上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』2006年、加島書店。
- <sup>25</sup> 上原敬二前掲書（24） p. 52。
- <sup>26</sup> 上原敬二前掲書（24） p. 52。
- <sup>27</sup> 上原敬二前掲書（24） p. 52。
- <sup>28</sup> 上原敬二前掲書（24） p. 52。

- 
- <sup>29</sup> 上原敬二前掲書 (24) p. 55。
- <sup>30</sup> 上原は履脱石 (くつぬぎいし) と表記しているが、京都大学貴重資料アーカイブに所蔵される文政 10 (1827) 年の奥書がある『石組園生八重垣伝』では脱履石 (くつぬぎいし) とされている。
- <sup>31</sup> 上原敬二前掲書 (24) p. 55。
- <sup>32</sup> 上原敬二『築山庭造伝後編 解説』加島書店、1965。
- <sup>33</sup> 鼻山人『珍説豹の巻』1827 (文政 10) 年。
- <sup>34</sup> 鼻山人『恩愛二葉草』1834 年 (天保 5) 年。
- <sup>35</sup> 高橋忠彦「喫茶養生記」高橋忠彦・神津朝夫『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』淡交社、2019 年、pp. 168-212
- <sup>36</sup> 高橋忠彦「喫茶往来」高橋忠彦・神津朝夫前掲書『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』淡交社、2019 年、pp. 214-236
- <sup>37</sup> 神津朝夫「烏鼠集」高橋忠彦・神津朝夫前掲書『茶書古典集成 1 初期の和漢茶書』淡交社、2019 年、pp. 362-492.
- <sup>38</sup> 熊倉功夫『山上宗二記』岩波書店、2006 年。
- <sup>39</sup> 竹内順一『現代語でさらりと読む茶の古典 山上宗二記』淡交社、2018 年。
- <sup>40</sup> 西山松之助『南方録』岩波書店、1986 年。
- <sup>41</sup> 上原敬二前掲書 (5) pp. 1-80。
- <sup>42</sup> 上原敬二前掲書 (5) pp. 88-89。
- <sup>43</sup> 紅染山鹿庵『古今茶道全書』水田甚左衛門、1694 年。早稲田大学図書館蔵  
※1~4 巻の原文については、解読が困難であり、確認できておらず、画のみを確認した。5 巻部については、注 45 の書籍にて確認済み。
- <sup>44</sup> 針ヶ谷鐘吉『諸国茶庭名跡図会・茶話指月集』加島書店、1976 年、pp. 3-94。
- <sup>45</sup> 谷晃・矢ヶ崎善太郎『茶譜』思文閣出版、2010 年、p. 666。
- <sup>46</sup> 谷晃・矢ヶ崎善太郎前掲書 (45) p. 39。  
(足偏に若) で一文字。この一文字にニシリと振ってあるが、本論では引用文内に (ニシリ) と表記した。
- <sup>47</sup> 「桂御別業之記」『〔第 25 号 京都 離宮・御所〕. 桂離宮』国立国会図書館蔵。
- <sup>48</sup> 前掲書 (47) pp. 5-6。
- <sup>49</sup> 北原保雄・鬼山信之『大蔵虎明本 狂言集総索引 2 大名狂言類』清文堂出版、1986 年。(別名『菊の花』)。
- <sup>50</sup> 北原保雄・鬼山信之『大蔵虎明本 狂言集総索引 2 大名狂言類』清文堂出版、1986 年。虎明本狂言にある別名『菊の花』と言われる狂言の題材がある。確かな成立時代は不明であるが、舞台は丁稚が方向をサボり、祇園を歩いていたところ、女郎に声を掛けられて連れられていった先を、主人に問い詰められるという展開となっている。
- <sup>51</sup> 『嵯峨流庭古法秘伝之書』が示す「履脱」について、天端が平らでなく履物を脱着する場には見えないこともあるが、そこに描かれている石の役名ではなく、「対面する場」、「履を脱ぐ場」などの空間そのものを示す添え書きである可能性があると考え。永享 7 (1435) 年『看聞日記』の記録には、「以状参、可構見参之由申之間、対面、〈昇沓脱候、〉召次幸藤同参、御剣進之、北面康郷」という表記があり、「対面」の所作に沓脱が含まれていた可能性も含め、今後の研究課題とする。
- <sup>52</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 14 春日権現験記絵 (上)』中央公論社、1982 年。
- <sup>53</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 法然上人絵伝 1~3 巻』中央公論社、1981 年。
- <sup>54</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 4 慕帰絵詞』中央公論社、1985 年。
- <sup>55</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 弘法大使行状絵詞 5~6 巻』中央公論社 1982-1983 年。
- <sup>56</sup> 太田昌子・大西廣・菅原昭英・松原茂・松原潔・毛塚万里『志度寺縁起絵 瀬戸内の寺をめぐる愛と死と信仰と』平凡社、2019。  
香川県東部にある真言宗の大寺、四国霊場第 86 番札所である志度寺に伝わる全 6 幅から

---

なる縁起絵。「讃州志度同上縁起」、「白杖童子縁起」、「当願暮当之縁起」、「松竹童子縁起」、「千歳童子蘇生記」、「阿一蘇生之縁起」からなる。

<sup>57</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 11 融通念仏縁起絵巻』中央公論社、1983 年。

<sup>58</sup> 小松茂美『日本絵巻大成 13 平治物語絵巻』中央公論社、1977 年。

<sup>59</sup> 小松茂美『日本絵巻大成 25 福富草紙』中央公論社、1979 年。

<sup>60</sup> 小松茂美『続日本絵巻大成 20 芦引絵』中央公論社、1983 年。

<sup>61</sup> 小松茂美前掲書 (4)。

<sup>62</sup> 村重寧「一遍上人絵伝」の画風—＜写実性＞と＜宋画風＞の問題」小松茂美『日本絵巻大成 別巻 一遍上人絵伝』1978 年、p p. 353-364。

<sup>63</sup> 藤田盟児「日本の住宅建築における空間的發展—日本文化の空間原理の研究 その 1」『名古屋造形大学・名古屋造形芸術大学短期大学部紀要』同朋学園名古屋造形大学、2000 年、p p. 45-66。

<sup>64</sup> 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典〔縮小版〕第五巻』小学館、1974 年、p. 1272。【昇殿・升殿】「平安期、清涼殿の南殿上間に登ることを「昇殿」と言い、五位以上もしくは六位の蔵人のみが許された。昇殿が可能な者を殿上人と呼ぶ一方で、そうではない者を地下と呼び分けた。」。

<sup>65</sup> 小泉和子「絵巻物に見る中世住宅の寝場所」小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会、1996 年、p p. 133-134。

<sup>66</sup> 太田博太郎「概説」伊藤延男・太田博太郎・関野克『文化財講座日本の建築 3 中世Ⅱ』第一法規出版、1977 年、p p. 17-20。

<sup>67</sup> 中村昌生「茶室」伊藤延男・太田博太郎・関野克『文化財講座日本の建築 5 近世Ⅱ・近代』第一法規出版、1976 年、p p. 44-46。

「利休もまた四畳半を継承していくが、＜中略＞彼はまず伝統的な四畳半の構成を解体すべく、入口の縁を除き、土間を付加することを試みた。＜中略＞北野大茶会の際の四畳半は、丸太の掘立柱に茅葺屋根の完全な草庵造りであった。＜中略＞中柱と炉を囲むように客と亭主が対坐する形式は、民家におけるいろりや大黒柱付近の団欒の場を思わせる。」※掘立柱、大黒柱、土間は民家より発生している。

<資料一覧>

安田靫彦『日本風俗書大成』中央美術社、1929年

小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人絵伝』中央公論社、1978年

小松茂美『続日本絵物大成 4 慕帰絵詞』中央公論社、1985年

小松茂美『続日本絵巻大成 法然上人絵伝 1～3巻』中央公論社、1981年

小松茂美『続日本絵巻大成 弘法大使行状絵詞 5～6巻』中央公論社 1982-1983年

小松茂美『続日本絵巻大成 11 融通念仏縁起絵巻』中央公論社、1983年

小松茂美『日本絵巻大成 13 平治物語絵巻』中央公論社、1977年

小松茂美『日本絵巻大成 25 福富草紙』中央公論社、1979年

小松茂美『続日本絵巻大成 20 芦引絵』中央公論社、1983年

太田昌子・大西廣・菅原昭英・松原茂・松原潔・毛塚万里『志度寺縁起絵 瀬戸内の寺をめぐる愛と死と信仰と』平凡社、2019。

山田秋衛『一遍上人絵伝解説』雄山閣、1932年

藤田盟児「日本の住宅建築における空間的發展—日本文化の空間原理の研究 その1」『名古屋造形大学・名古屋造形芸術大学短期大学部紀要』同朋学園名古屋造形大学、2000年

小松茂美『続日本絵巻大成 14 春日権現験記絵（上）』中央公論社、1982年

小松茂美『日本絵巻大成 8 年中行事絵巻』中央公論社、1977年

宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社、1981年

小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会、1996年

谷晃・矢ヶ崎善太郎『茶譜』思文閣出版、2010年

西澤文隆『伝統の合理主義』丸善、1981年

今和次郎『日本の民家』岩波書店、1989年

日本大辞典刊行会『日本国語大辞典〔縮小版〕第三巻』小学館、1973年

日本大辞典刊行会『日本国語大辞典〔縮小版〕第五巻』小学館、1974年

太田博太郎「概説」伊藤延男・太田博太郎・関野克『文化財講座日本の建築 3 中世Ⅱ』第一

法規出版、1977 年

上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』加島書店、2006 年

上原敬二『築山庭造伝後編 解説』加島書店、1965 年

上原敬二『解説 余計作り庭の図・他三古書』加島書店、1975 年

上原敬二・渡辺虎一『建築材料としての石材』進展社、1947 年

上原敬二『飛石・手水鉢』加島書店、1958 年

國書刊行會『明月記』國書刊行會、1910 年

梶屋隆介・小林薫『週刊絵で知る日本史 17 聖徳太子絵伝』集英社、2011 年

「桂御別業之記」『〔第 25 号 京都 離宮・御所〕. 桂離宮』国立国会図書館蔵。

林陸朗・朝倉治彦・長谷川正次編、小森隆吉・寺田登校注『旧幕府引継書 江戸町方書上 浅草 上』新人物往来社、1987 年。

北原保雄・鬼山信之『大蔵虎明本 狂言集総索引 2 大名狂言類』清文堂出版、1986 年

飛田範夫「造園古書の系譜」日本造園学会『造園雑誌 47 (5)』日本造園学会、1983 年

森蘊『日本の庭園』集英社、1974 年

庭園古書刊行会『築山染指録』大原出版企画、1975 年。

上原敬二『築山庭造伝（前編）解説』加島書店、1989（昭和 64）年

中村昌生「茶室」伊藤延男・太田博太郎・関野克『文化財講座日本の建築 5 近世Ⅱ・近代』

第一法規出版、1976 年

## 図 版 一 覧

- (図 1) 『聖徳太子絵伝』(橘寺所蔵) に描かれた沓脱板
- (図 2) 『年中行事絵巻』 中門廊妻戸前・侍廊前に備わる沓脱板
- (図 3) 『嵯峨流庭古法秘伝』 真の真体の図「対面 履脱」の文字
- (図 4) 『石組園生八重垣伝』 に記された「飛石沓拔五ヶ之法」の図
- (図 5) 『石組園生八重垣伝』 に記された「岩段沓拔組方」の図
- (図 6) 『石組園生八重垣伝』 に記された「横勝手踏段」の図
- (図 7) 『石組園生八重垣伝』 に記された「真の履脱石(踏段石とも)」の図
- (図 8) 『石組園生八重垣伝』 に記された「略伝踏段」の図
- (図 9) 『築山庭造伝(後編)』 の「躡揚踏段石を示す定式茶庭全図」
- (図 10) 『一遍上人絵伝』 善光寺入った僧房前の沓脱石
- (図 11) 『一遍上人絵伝』 善光寺の僧房前の沓脱石
- (図 12) 『一遍上人絵伝』 善光寺外の僧房前の沓脱石
- (図 13) 『一遍上人絵伝』 大隅正八幡宮拝殿前の沓脱石
- (図 14) 『一遍上人絵伝』 備前国藤井政所邸の沓脱石
- (図 15) 『一遍上人絵伝』 下野國小野寺鳥居前の板屋の沓脱石
- (図 16) 『一遍上人絵伝』 三島社鳥居前の板屋の沓脱石
- (図 17) 『一遍上人絵伝』 倉敷教願の住房前の沓脱石
- (図 18) 『慕帰絵』 履物が脱ぎ置かれる沓脱板(澄海の住房慈信房)
- (図 19) 『一遍上人絵伝』 肥前国華台上人の僧房前の沓脱板
- (図 20) 『一遍上人絵伝』 大宰府聖達上人邸前の沓脱板
- (図 21) 『一遍上人絵伝』 京都因幡堂街道挟んだ邸前の沓脱板
- (図 22) 『一遍上人絵伝』 信濃佐久小田切の里武士の館の沓脱板
- (図 23) 『一遍上人絵伝』 佐久群大井太郎邸主屋前の沓脱板

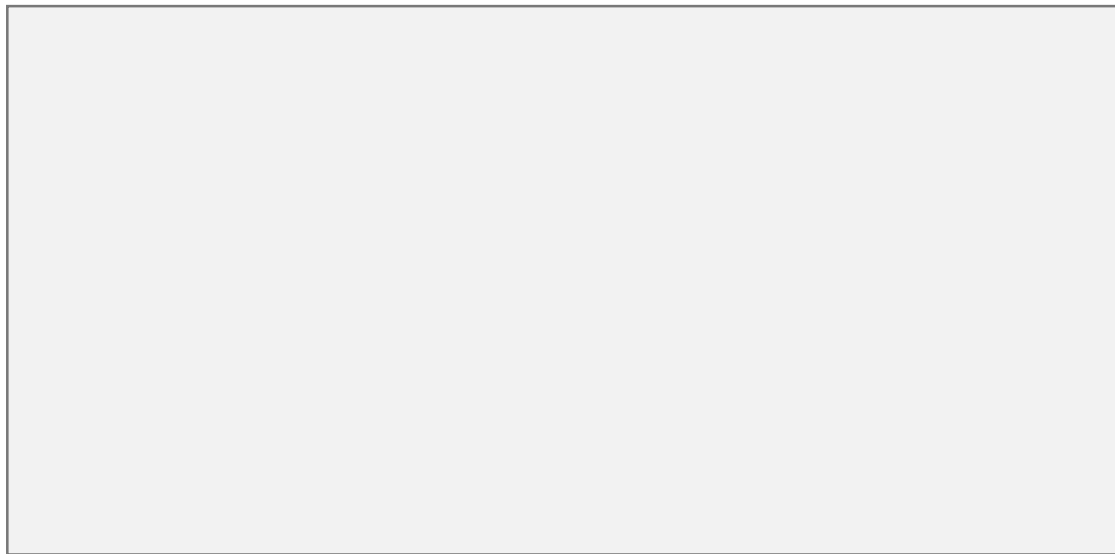
- (図 24) 『一遍上人絵伝』 尾張国甚目寺本堂に備わる沓脱板
- (図 25) 『一遍上人絵伝』 兵庫加古川市野口教信寺本堂の沓脱板
- (図 26) 『一遍上人絵伝』 当麻寺曼荼羅堂前の沓脱板
- (図 27) 『年中行事絵巻』 寝殿造の中門廊南側の沓脱板と南階 (12 世紀)
- (図 28) 藤原俊盛邸の中門廊側面妻戸前の沓脱板と唐破風
- (図 29) 「南階・西中門廊のない寝殿造、藤原俊盛の邸」
- (図 30) 檜皮葺の屋根を持つ明禅の住房前の沓脱石

#### 表 一 覧

- 表 1) 沓脱板・沓脱石調査データベース (11～15C) ※沓脱石のある絵巻のみ抜粋
- 表 2) 沓脱板・沓脱石調査データベース (名所図会) ※抜粋版
- 表 3) 沓脱板・沓脱石調査データベース (江戸時代) ※抜粋版
- 表 4) 沓脱・沓脱板・沓脱石・躡揚踏段石に関する描写と表記の一覧

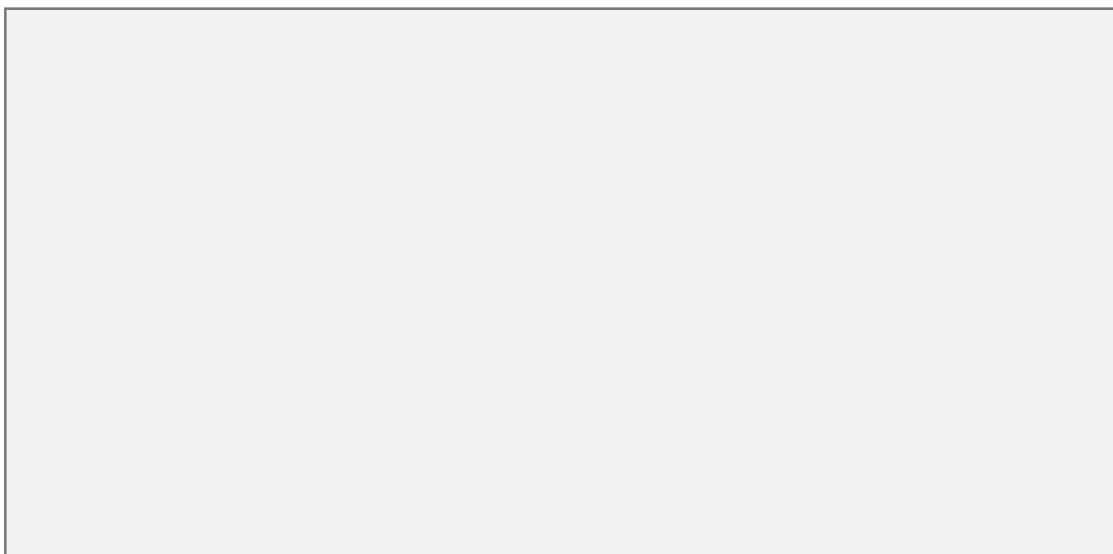


<図 版>



(図 1) 『聖徳太子絵伝』(橘寺所蔵) に描かれた沓脱板

出典：梶屋隆介・小林薫『週刊絵で知る日本史 17 聖徳太子絵伝』 pp. 6-8 に転載加筆



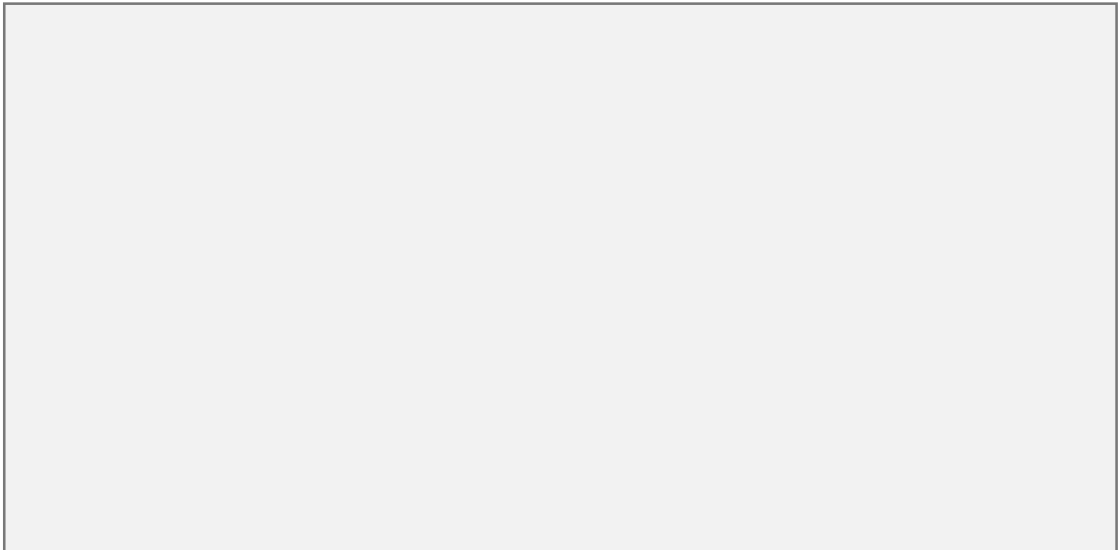
(図 2) 『年中行事絵巻』 中門廊妻戸前・侍廊前に備わる沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成 8 年中行事絵巻』 pp. 16-17 に転載加筆



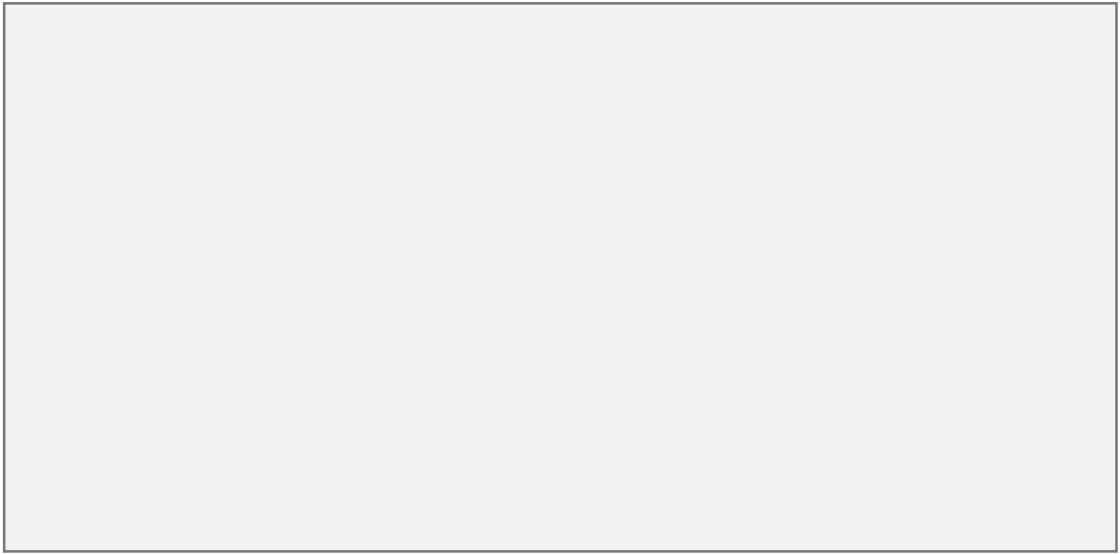
(図 3) 『嵯峨流庭古法秘伝』 真の真体の図「対面 履脱」の文字

出典：上原敬二『解説 余計作りの庭の図・他三古書』 p. 58 に転載加筆



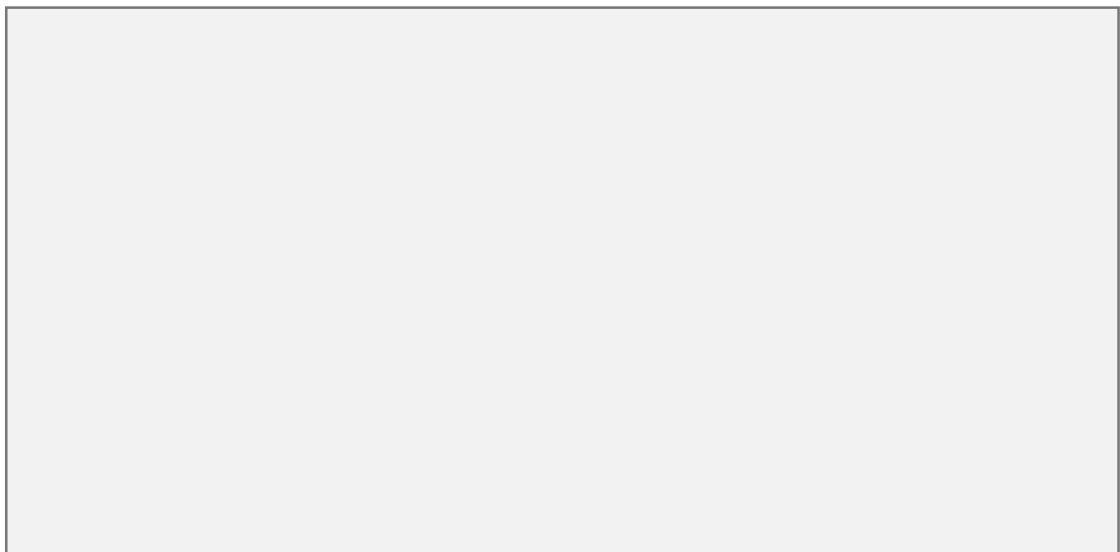
(図 4) 『石組園生八重垣伝』に記された「飛石沓拔五ヶ之法」の図

出典：上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』 p. 52 より転載



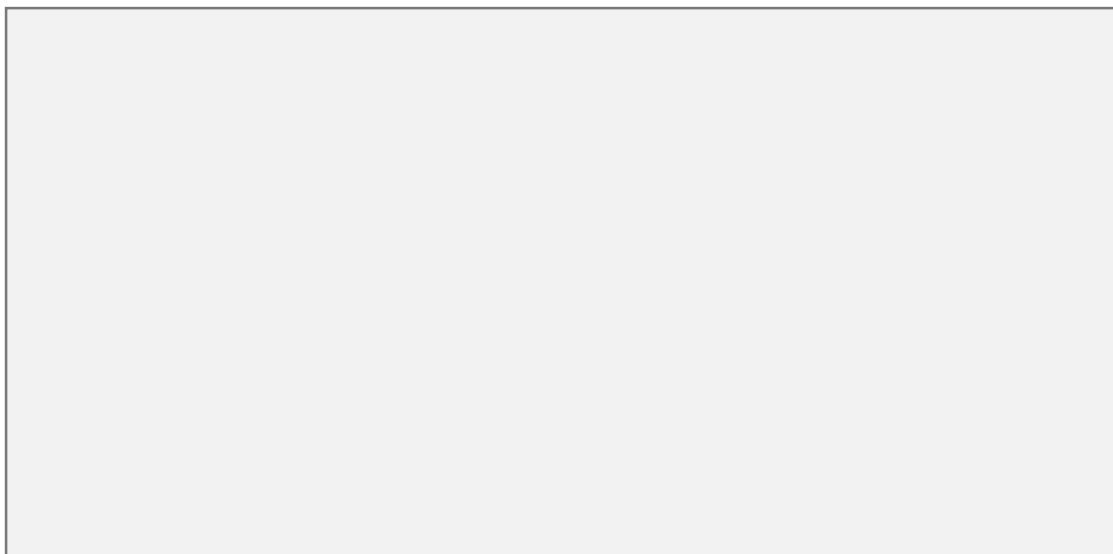
(図 5)『石組園生八重垣伝』に記された「岩段沓抜組方」の図

出典：上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』p.52 より転載



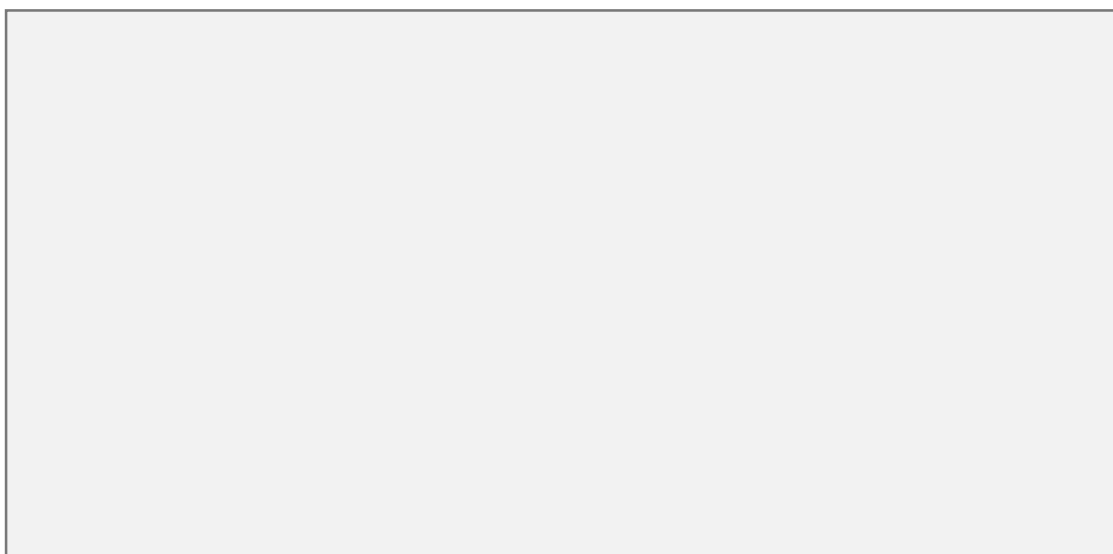
(図 6)『石組園生八重垣伝』に記された「横勝手踏段」の図

出典：上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』p.52 より転載



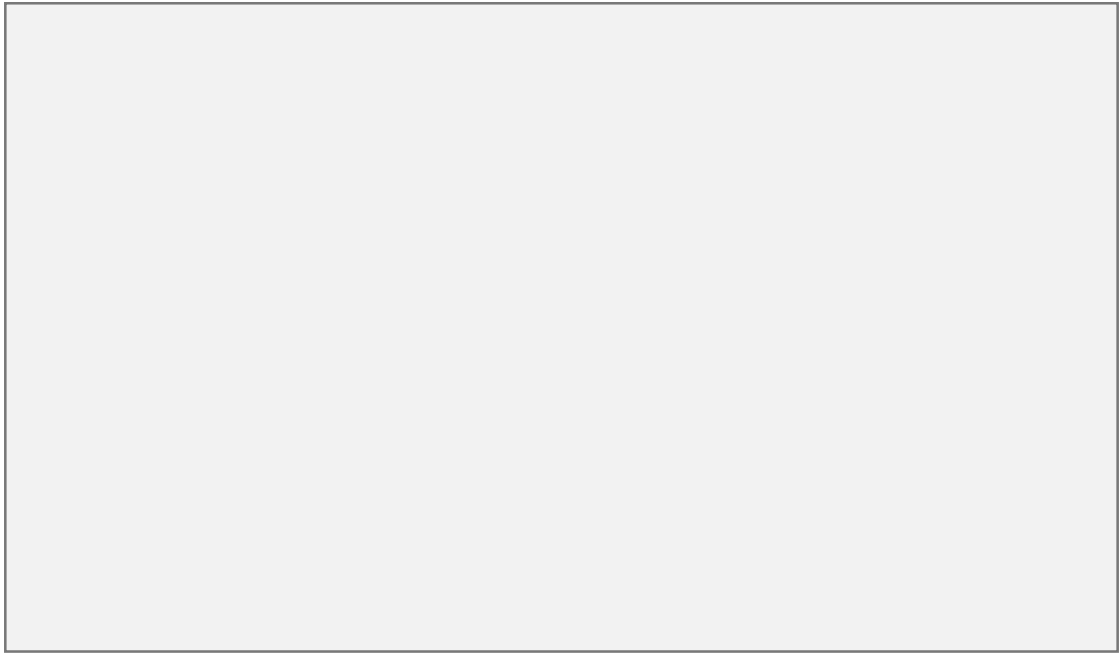
(図 7)『石組園生八重垣伝』に記された「真の履脱石（踏段石とも）」の図

出典：上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』p. 55 より転載



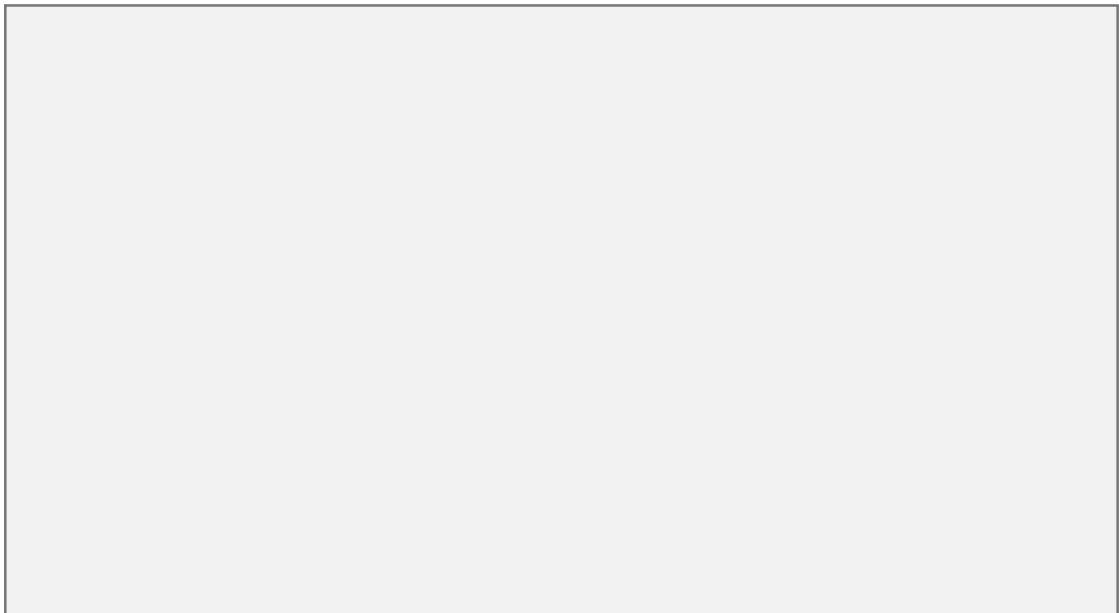
(図 8)『石組園生八重垣伝』に記された「略伝踏段」の図

出典：上原敬二『石組園生八重垣伝 解説』p. 55 より転載



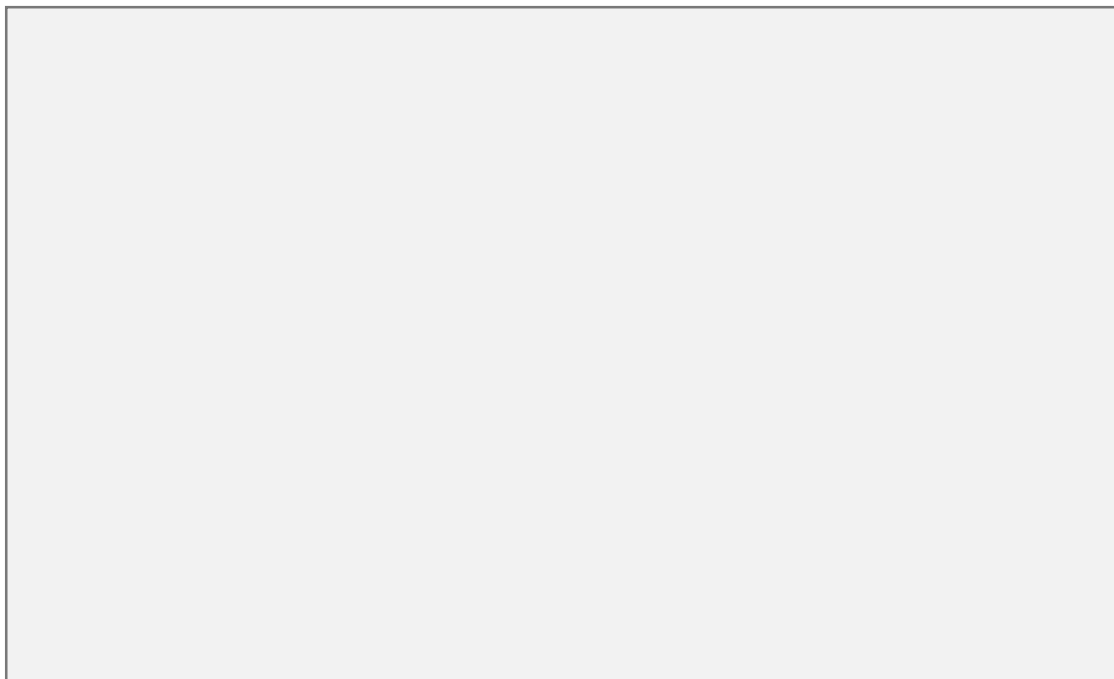
(図 9) 『築山庭造伝（後編）』の「躡揚踏段石を示す定式茶庭全図」

出典：上原敬二『築山庭造伝（後編）解説』p. 25 に転載加筆



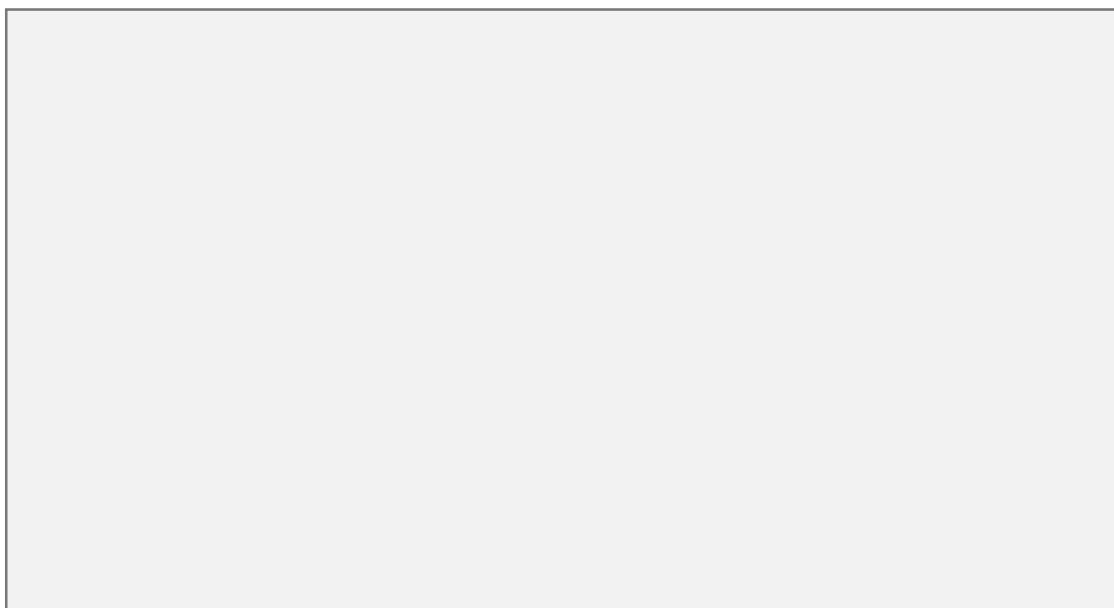
(図 10) 『一遍上人絵伝』善光寺入った僧房前の沓脱石

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』pp. 24-25 に転載加筆



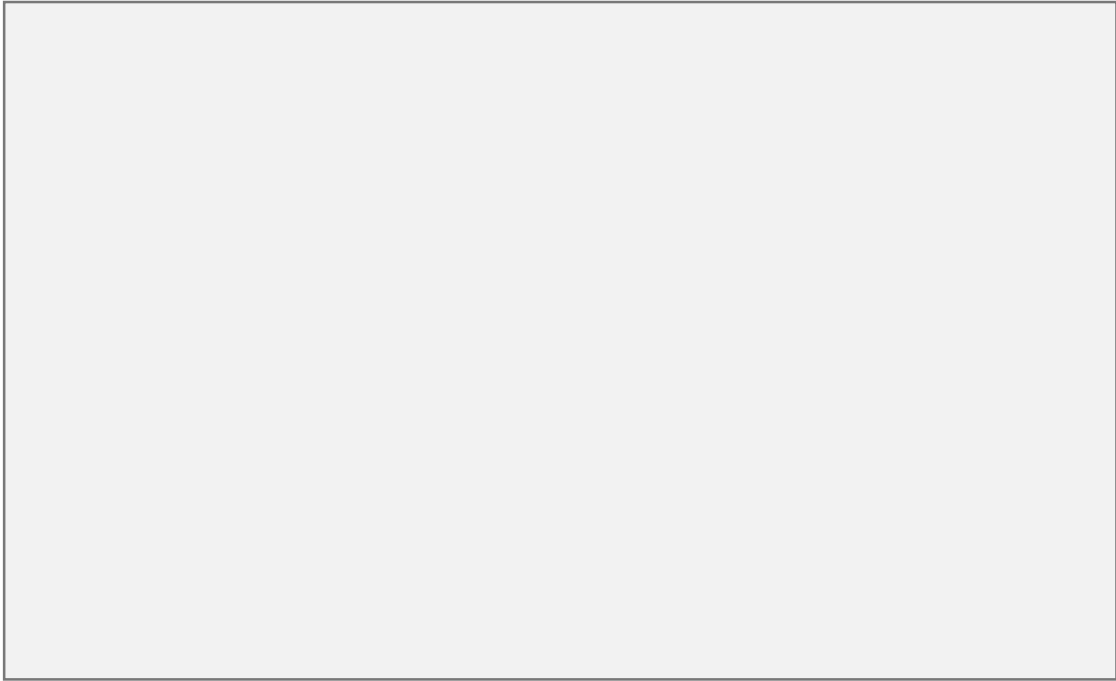
(図 11) 『一遍上人絵伝』 善光寺の僧房前の沓脱石

出典：小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 pp. 24-25 に転載加筆



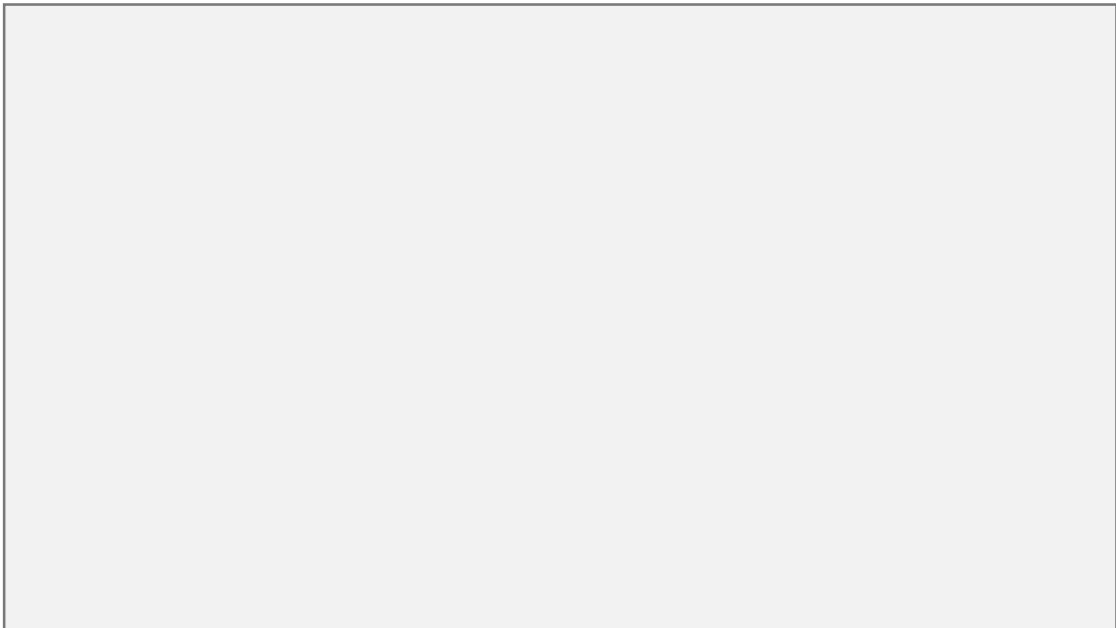
(図 12) 『一遍上人絵伝』 善光寺外の僧房前の沓脱石

出典：小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 26 に転載加筆



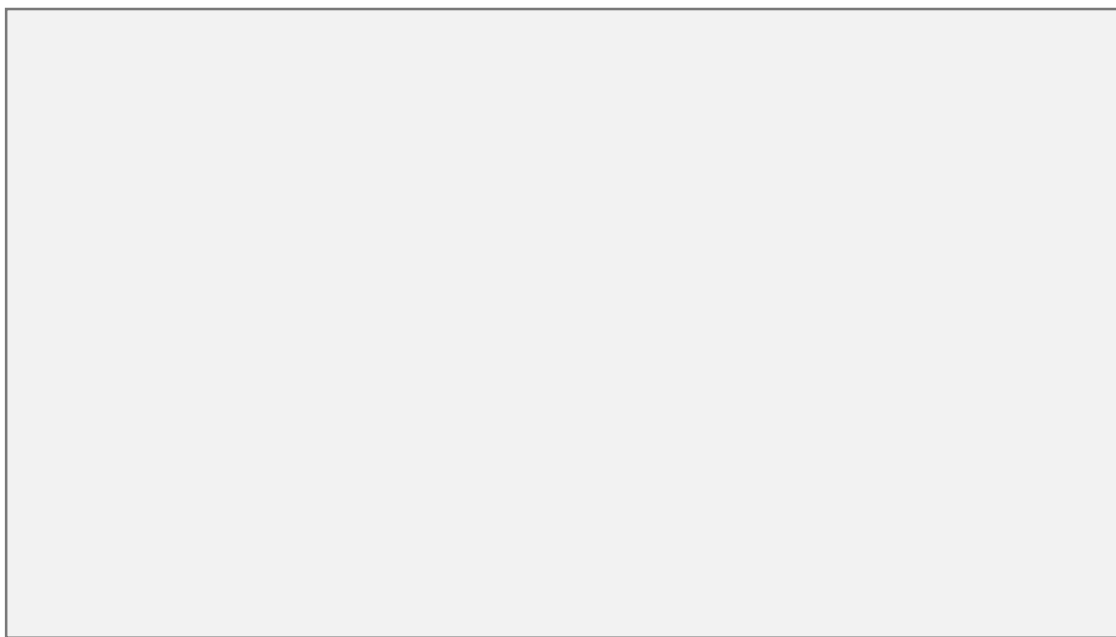
(図 13) 『一遍上人絵伝』 大隅正八幡宮拝殿前の沓脱石

出典：小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 pp. 90-91 に転載加筆



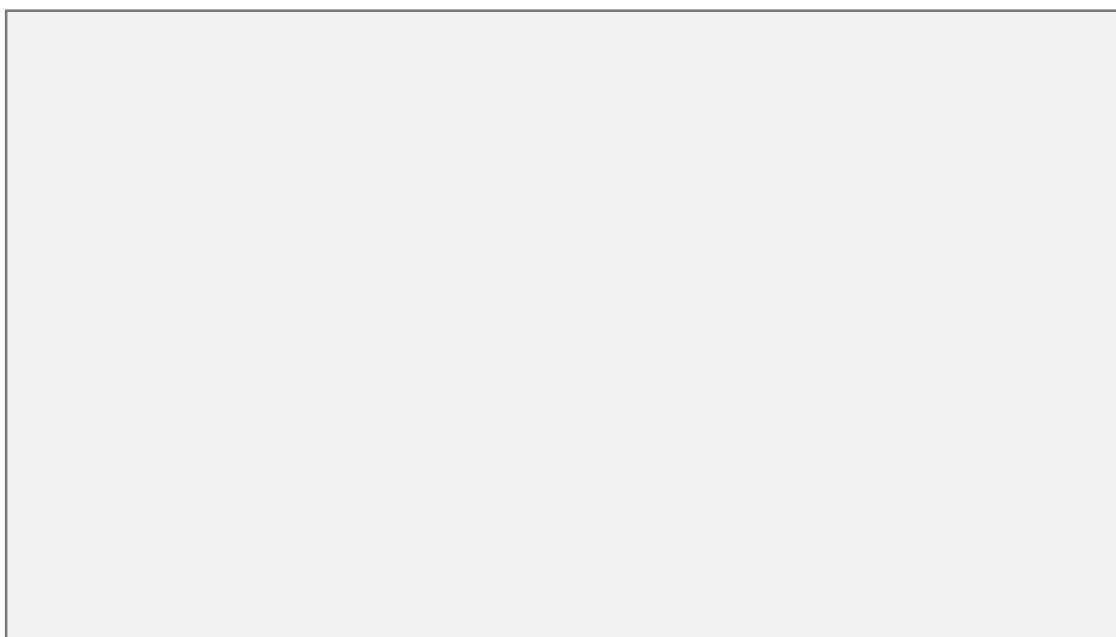
(図 14) 『一遍上人絵伝』 備前国藤井政所邸の沓脱石

出典：小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 pp. 96-97 に転載加筆



(図 15) 『一遍上人絵伝』 下野國小野寺鳥居前の板屋の沓脱石

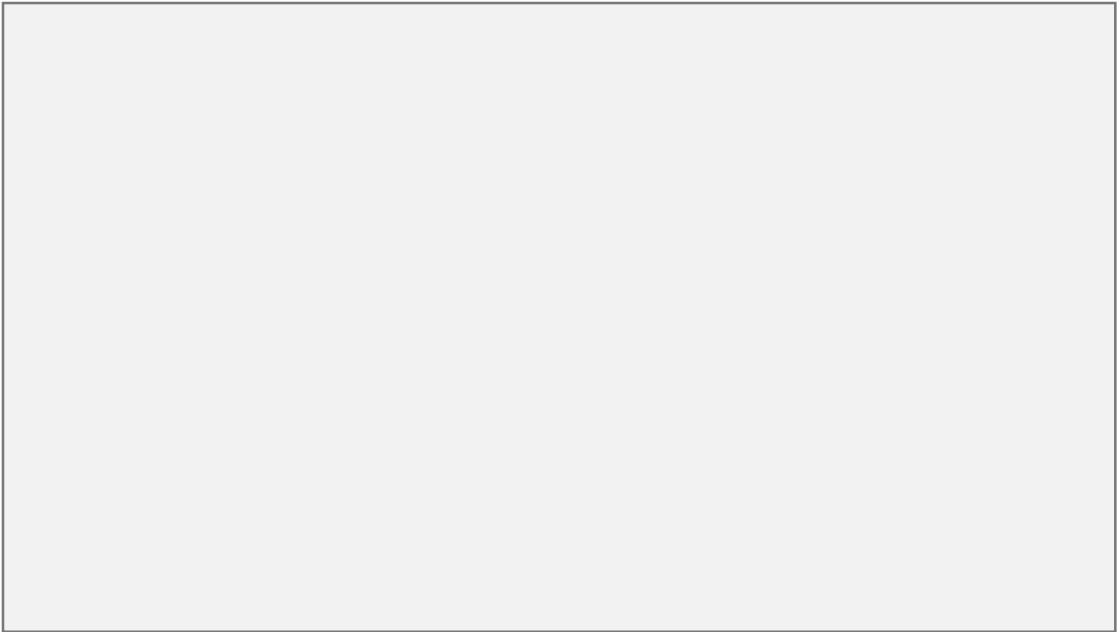
出典：小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 pp. 122-123 に転載加筆



(図 16) 『一遍上人絵伝』 三島社鳥居前の板屋の沓脱石

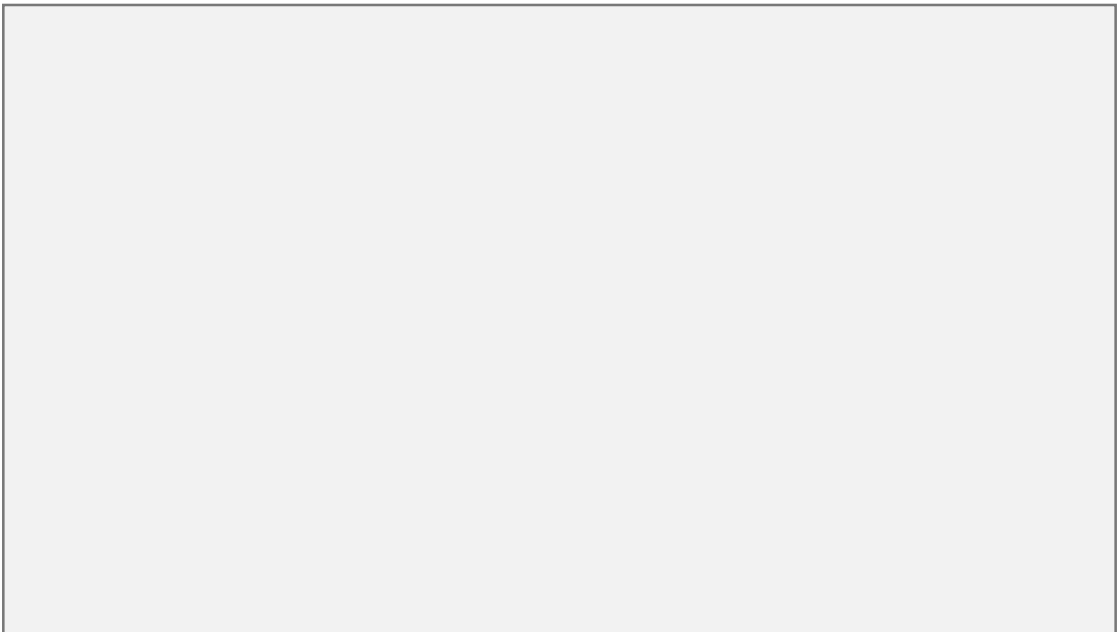
出典：『小松茂美 『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 149 に転載加筆





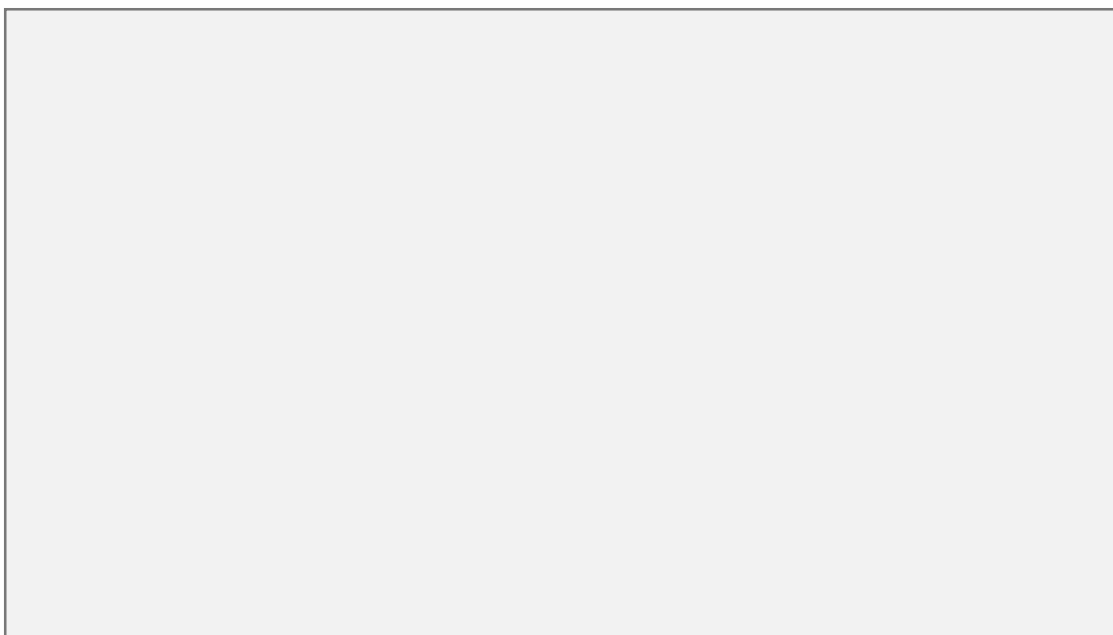
(図 17) 『一遍上人絵伝』 倉敷教願の住房前の沓脱石

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 264 に転載加筆



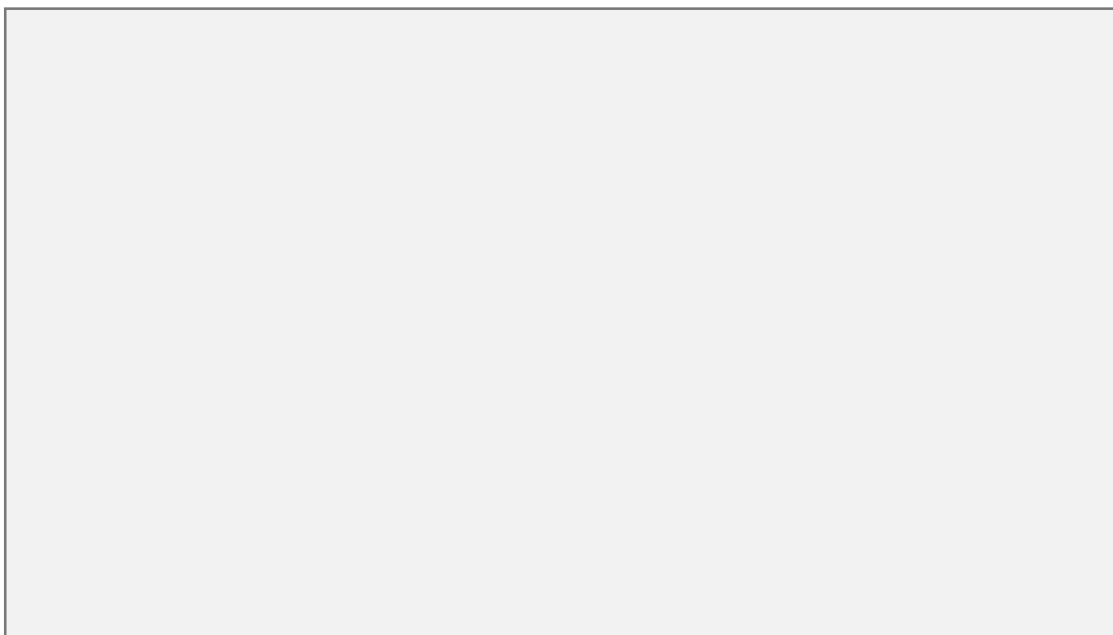
(図 18) 『慕帰絵』 履物が脱ぎ置かれる沓脱板（澄海の住房慈信房）

出典：小松茂美『続日本絵物大成 4 慕帰絵詞』 pp. 10-11 に転載加筆



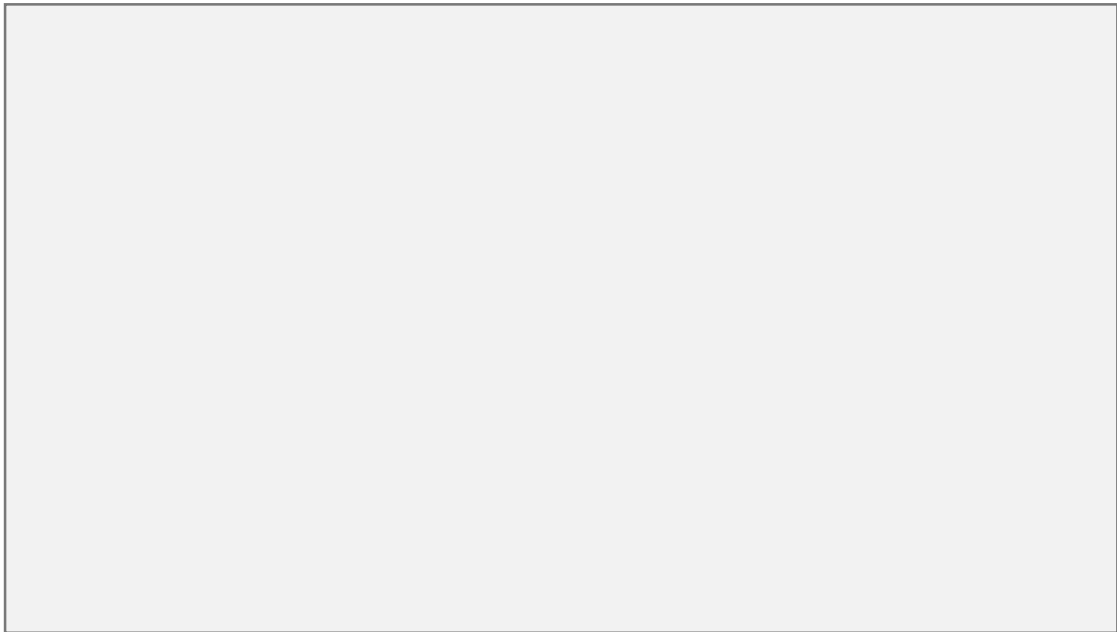
(図 19) 『一遍上人絵伝』 肥前国華台上人の僧房前の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 9 に転載加筆



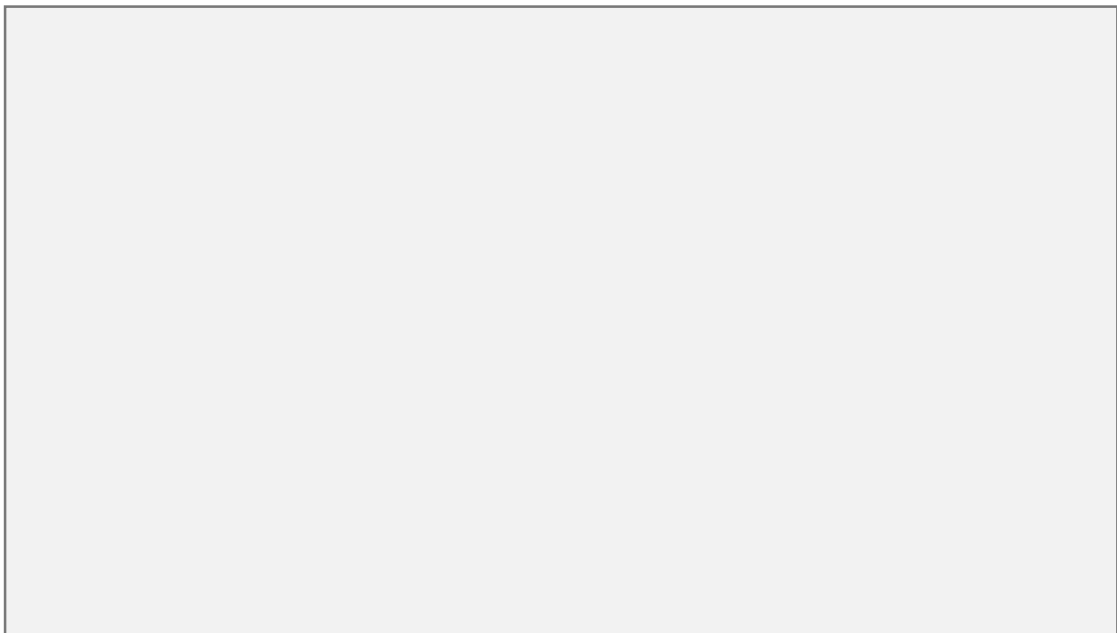
(図 20) 『一遍上人絵伝』 大宰府聖達上人邸前の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 13 に転載加筆



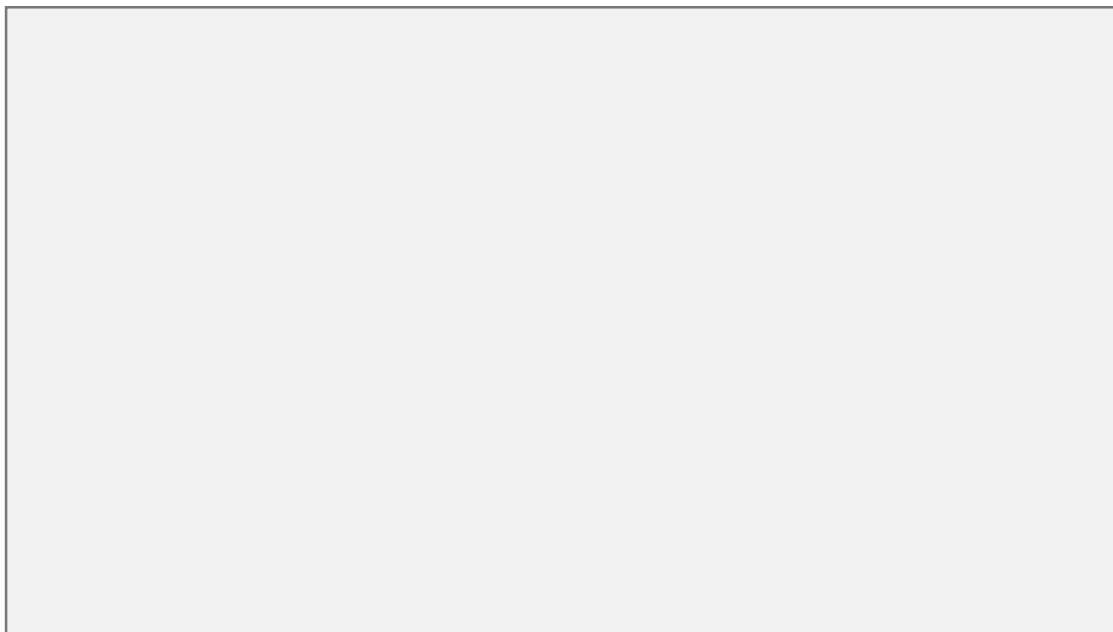
(図 21) 『一遍上人絵伝』 京都因幡堂街道挟んだ邸前の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 105 に転載加筆



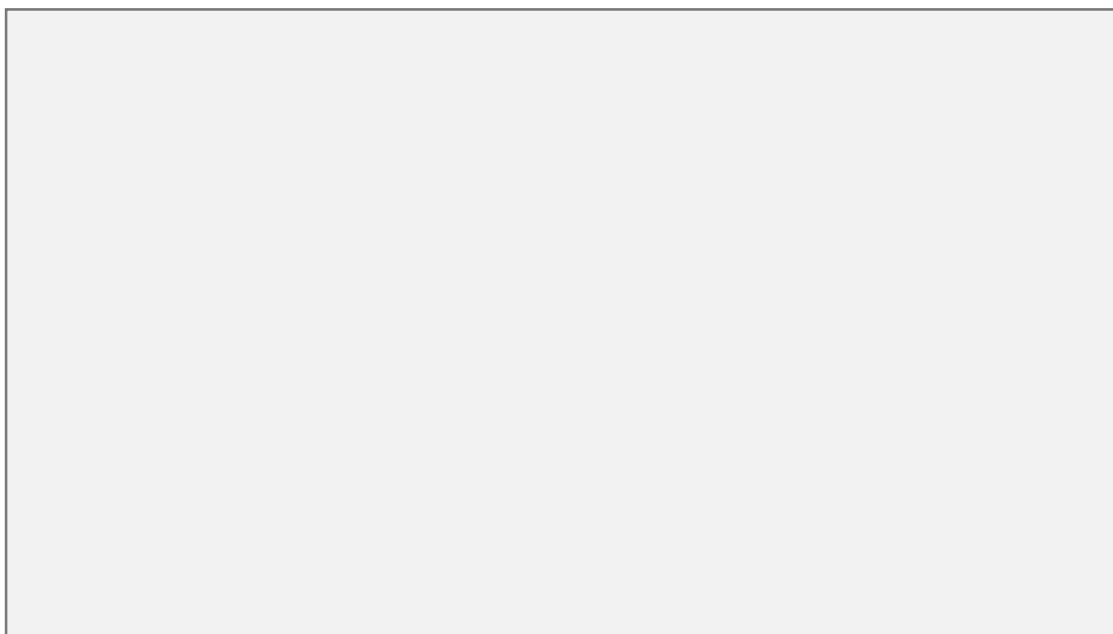
(図 22) 『一遍上人絵伝』 信濃佐久小田切の里武士の館の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 113 に転載加筆



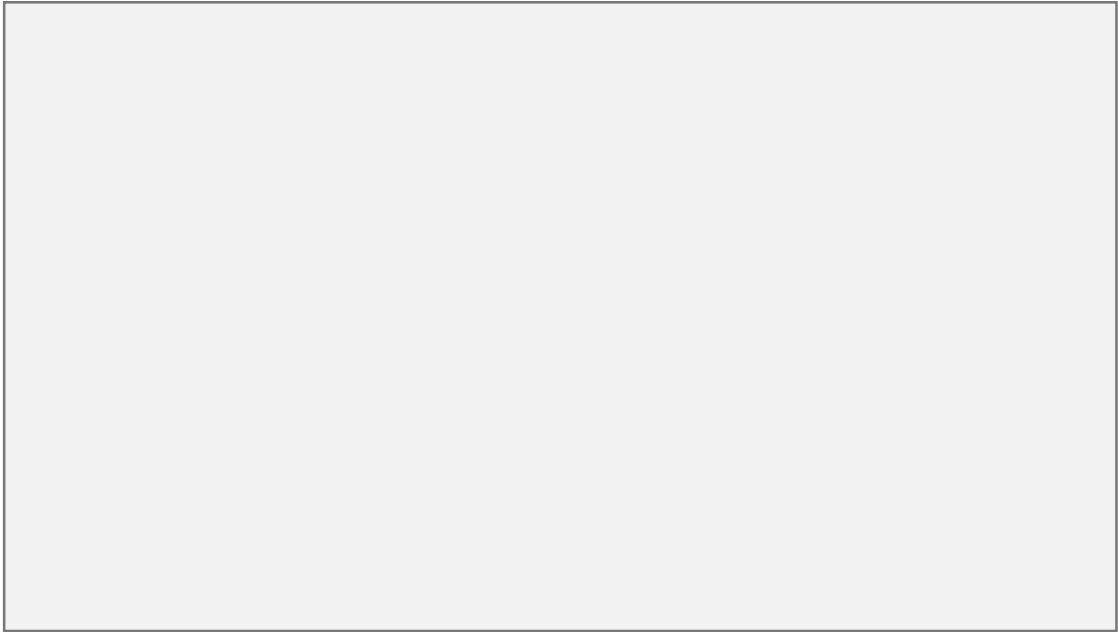
(図 23) 『一遍上人絵伝』 佐久群大井太郎邸主屋前の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 117 に転載加筆。



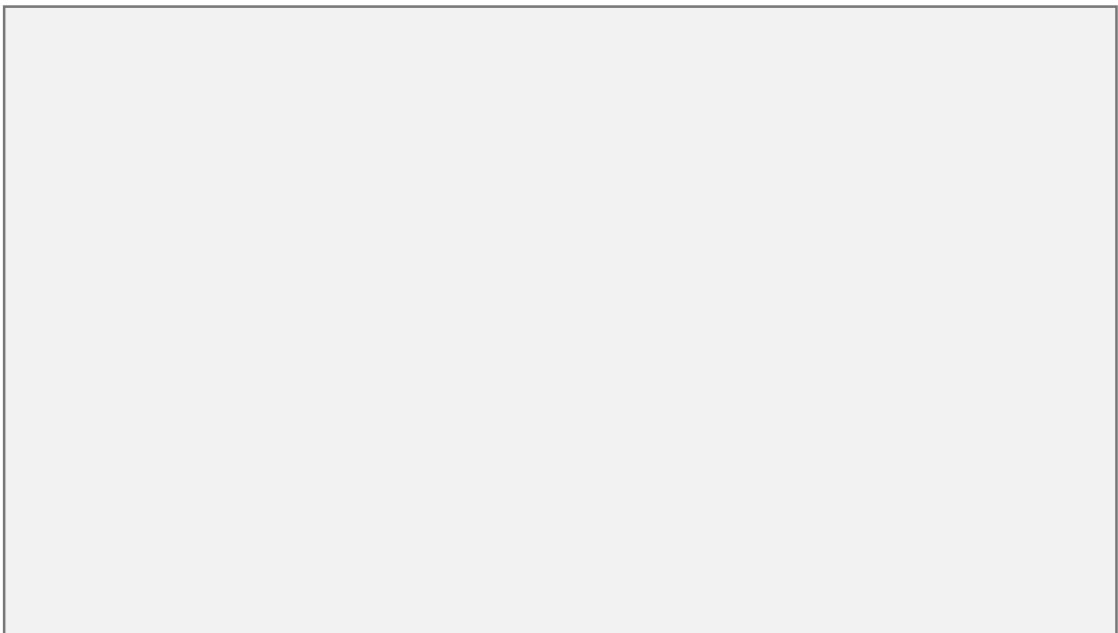
(図 24) 『一遍上人絵伝』 尾張国甚目寺本堂に備わる沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 169 に転載加筆。



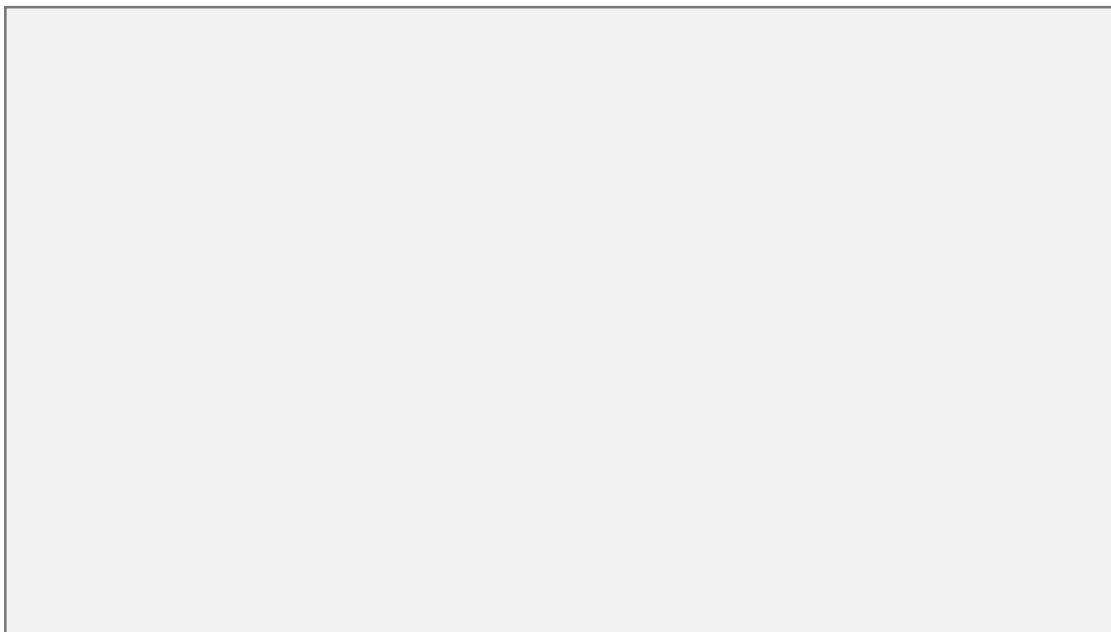
(図 25) 『一遍上人絵伝』 兵庫加古川市野口教信寺本堂の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 248 に転載加筆。



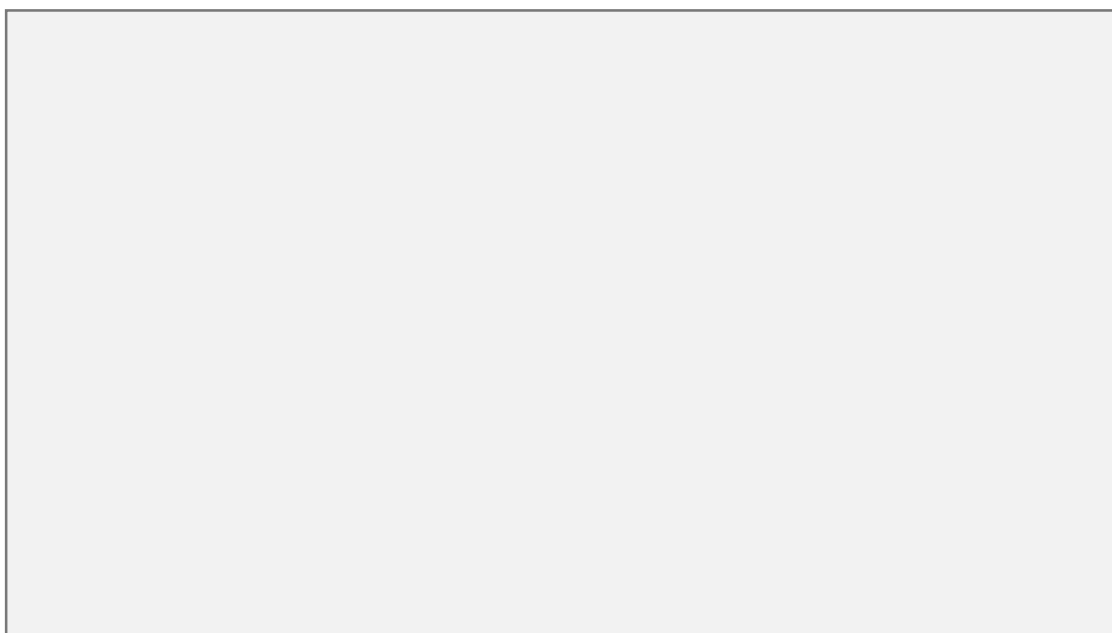
(図 26) 『一遍上人絵伝』 当麻寺曼荼羅堂前の沓脱板

出典：小松茂美『日本絵巻大成別巻一遍上人聖絵伝』 p. 230 に転載加筆。



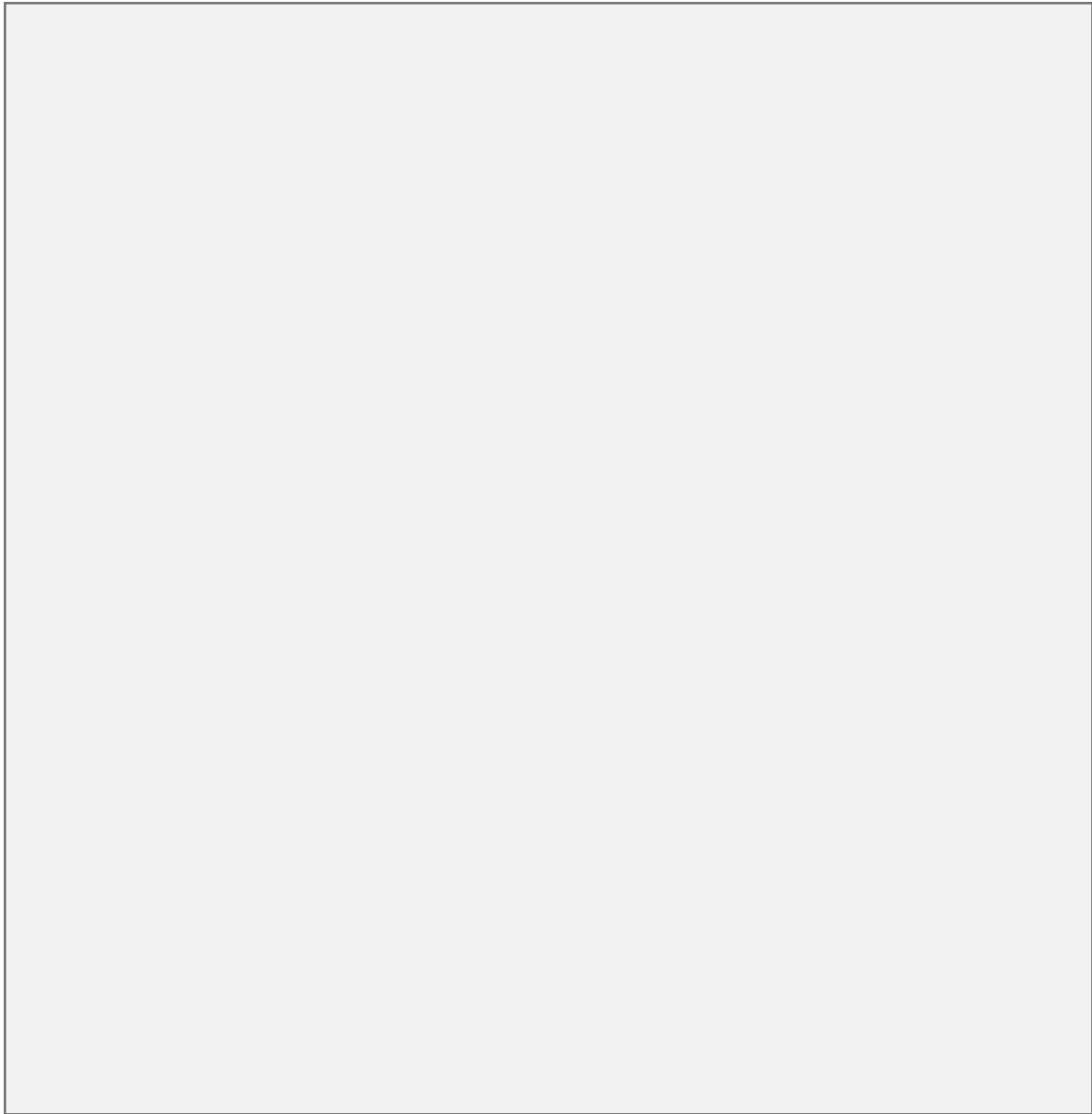
(図 27) 『年中行事絵巻』 寝殿造の中門廊南側の沓脱板と南階 (12 世紀)

出典：小松茂美『日本絵巻大成 8 年中行事絵巻』 pp. 18-19 に転載加筆。



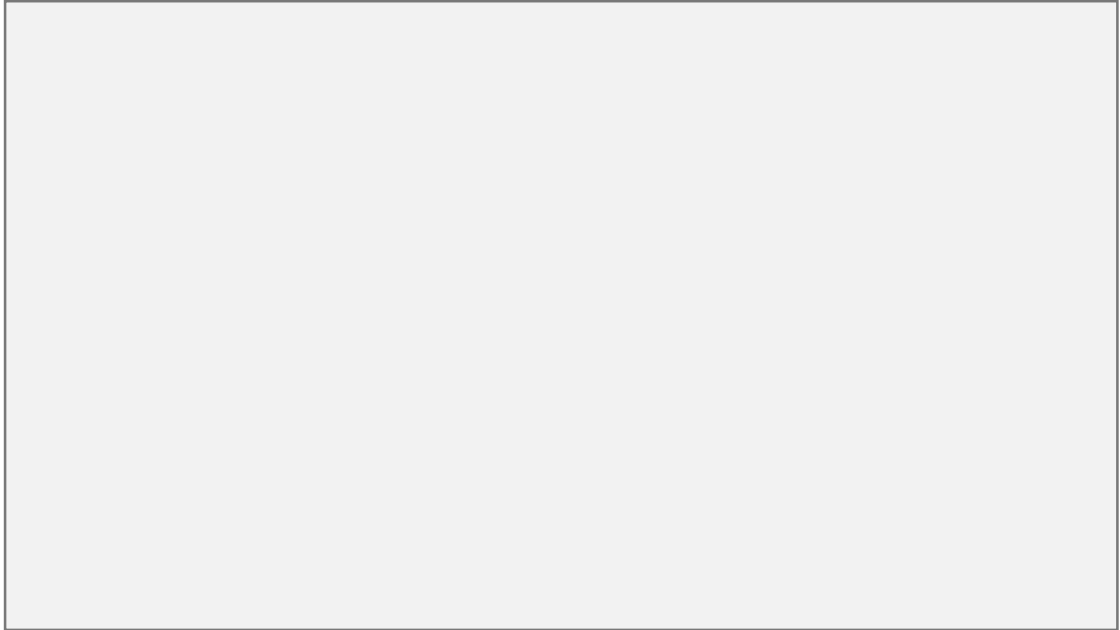
(図 28) 藤原俊盛邸の中門廊側面妻戸前の沓脱板と唐破風

出典：小松茂美『続日本絵巻大成 14 春日権現験記絵 (上)』 p. 31 に転載加筆。



(図 29) 「南階・西中門廊のない寝殿造、藤原俊盛の邸」

出典：小松茂美『続日本絵巻大成 14 春日権現験記絵 上』 p p. 32-33 転載。



(図 30) 檜皮葺の屋根を持つ明禪の住房前の沓脱石

出典：小松茂美『続日本絵巻大成 1 法然上人絵伝（上）』p. 43 に転載加筆。



表 1. 沓脱板・沓脱石調査データベース＜中世絵巻物（11～15 世紀）＞

成立年	史資料名	作者・編者	沓脱石 沓脱板	絵的描写	配置
13 C					
1299（正安1）年	一遍上人聖絵伝		石	善光寺入った僧房	縁中央－方形単独
			石	善光寺僧房	縁中央左付近－方形単独
			石	善光寺外の僧房	入口－方形単独
			石	鹿児島正八幡宮 拝殿前	縁中央－方形単独
			石	備前国 藤井政所邸 庭側縁	庭側縁－方形単独（履物）
			石	伊豆三島大社前 僧房	縁中央－方形単独（履物）
			石	下野国 小野寺境内	縁－方形単独（履物複数）
			石	倉敷軽部の里 教願住房	縁－方形単独（履物）
			板	肥前国 華台上人邸	縁中央
			板	大宰府 聖達上人邸	廻縁前
			板	京都 因幡堂道狭んだ邸	縁中央
			板	信濃（佐久）小田切の里武士の館	縁－（足掛け）
			板	佐久群 武士大井太郎邸	縁－建物中央
			板	兵庫 加古川市野口 教信寺	縁－中央付近
	板	奈良 当麻寺曼陀羅堂	縁（高欄付き）－中央		
14 C					
1307（徳治2）年	法然上人絵伝		板	肥後 阿闍梨皇円 功德院	
			石	法然の住房 変形中門廊南	高下駄
			板	中川寺 阿闍梨実範の僧房	
			板	法然の僧房	
			石	法然の家	板屋
			板	法然の吉水の房	
			石	法然 吉水の庵室	板屋/草履
			石	27-24 熊谷入道蓮生の屋形	板屋/束あり
			石	29-4 法然の住房	切石
			板	29-9 兵部卿三位平基親邸	
			石	29-12 法然の住房	自然切石（29-4）と同一
			板	41-14 西林寺の僧正承円の住房	
1351（観応2）年	募帰絵詞		石	41-16 明禅の住居	
			石	48-9 建春門院御所	
			板	1-16 澄海の房	
			板	2-6 右府僧 浄珍の居室邸	
			板	2-21 僧房	
			板	4-9 親鸞の開居	自然石に板を渡す
			石	5-4 鎌倉唯善房の屋敷	自然形
			板	5-8 広壮な屋敷	
			石	8-9 竹杖庵	
			板	8-14 竹杖庵 主 宗昭の開居	
1374-1389（応安元年-慶 応元年）	弘法大使行状絵詞		板	9-33 某の僧都「七十有余」の高	
			板	10-23 宗昭の病室	
			板	1-6 佐伯家 正面	
			板	2-4 横尾の山寺(施福寺)大師得度	
			石	2-26 修繕寺(束石なし)	
14 C 初	志度寺縁起絵巻		特7	3-2 中国禅様建築の縁側？	
			板	4-3 中国東塔院(現)青龍寺跡	
			(※)	大師の入定と高尾山における山岳	
			石		
14 C（正和3年）	融通念仏縁起絵巻		板	上-9 良忍の住房	住房の全体が掴める
			石	上-9 良忍の住房	自然形の沓脱に草履があり正面に有
			石	上-13 良忍 大原の庵室	自然形 束石有(上記同様)
			板	上-13 良忍 大原の庵室	上-9と同じ配置
			石	下-6 大原の庵室	上-13と同じ場だが少し異なる
			石	下-10 大原の庵室	上-13と同じ場
			石	下-18 大原の庵室	上-13と同じ場
			石	下-23 青木の尼公の庵室	良忍の庵室と配置は同じ
	板	下-38 同上の娘の家			
15 C					
1425（応永32）	平治物語絵巻常葉巻		石	6紙 中宮御所 勝手口	※正面には踏板
			石	7紙 中宮御所 正面	3本脚※頼朝の母の話 絵は土佐伊
15 C 初	福富草紙		石	12紙	沓脱板と重なる石
			板	12紙	沓脱の石と重なる板/履物
15 C	芦引絵		要確認		
			板	1-26 白河知人の家	
			板	1-33 白河知人の家	
			板	1-41 白河知人の家	
			板	2-10 東大寺 東南院の僧都の房	
			板	2-27 1-22と同じ邸	
			石	3-8 君の房 自然石	束石有
			板	3-48 京 父朝臣の家	
	板	4-23 覺然上座の宿房			

※表は主だった史資料一部のみを抜粋して表示

表 2. 沓脱板・沓脱石調査データベース&lt;江戸期名所図会（18～20 世紀）&gt;

成立年	史料名	作者・編者	沓脱石 沓脱板	絵的描写	配置
18C					
1780（安永9）年	都名所図会	秋里蘿島	一卷	28描写中4つ該当しない残り24描写	
			二巻	35描写中7つ該当しない残り28描写	
			石	本願寺花畑横建物前	正面縁一方形
			三巻	55描写中6か所該当しない残り49描	
1787（天明7年）	拾遺名所図会	秋里蘿島	一卷	25紙中4紙適合外 残21紙中1紙適	
			石	俊成卿社	縁一自然一飛石（横に手水鉢）
			二巻の一	31紙中3紙適合外 残28紙中4紙適	
1794（寛政6年）	住吉名勝図会		一卷	16紙中4紙該当なし残2紙該当	
			二巻	23紙中10紙該当なし残13紙該当なし	
			三巻	20紙中4紙該当なし残16紙該当なし	
			五巻	17紙中4紙該当なし残13紙中2紙該当	
1796（寛政8-10）年	摂津名所図会（秋里蘿島・竹原春朝斎）	一卷		35紙中8紙該当なし残27紙中4紙	
			石	天下茶村	茶屋縁一自然
		二巻		29紙中5紙該当なし残24紙中1紙	
			石	安井天神山	縁一自然一飛石
1796（寛政8）年	和泉名所図会	二巻	秋里蘿	53紙中8紙該当なし残45紙中1紙踏	
1797（寛政9年）	伊勢参宮名所図会		上巻	99紙中13紙該当なし 残86紙該当	
			下巻	85紙中24紙該当なし 残81紙中2	
			石	古市	縁一自然（横に手水）一飛石
1799（寛政11）年	都林泉名勝図会	秋里蘿島	石	相国寺 枯光院	方形、縁、木/用明天皇
			石	大徳寺 如意庵	方形、下駄、縁
			石	銀閣寺 音閣	方形
		五巻	石	嵯峨小督の家	縁一自形一門
1797（寛政9）年	東海道名所図会	一卷	秋里蘿	33紙中8紙該当なし残25紙該当なし	
		二巻	島・竹原	47紙中12紙該当なし残35紙中1紙	
		三巻	春朝斎	36紙中12紙該当なし残24紙1紙	
		六巻		36紙中12紙該当なし残24紙該当なし	
1800（寛政12年）	大和名所図会（秋里蘿島・竹原春朝斎）	一卷		21写面中10写該当なし残り11写の	
		二巻		30写面中7該当なし残り23写全て該	
		三巻		42写面中8該当なし、残り34中2か	
		四巻		26紙面中12紙該当なし残14紙中2	
		六巻挿	石	みよしの	縁一踏板一自然形
19C					
1801（享保元年）	河内名所図会	一卷	秋里蘿	10紙中該当なし	
1803（享和3年）	播磨名所図会	一卷		17紙中7紙該当なし残10紙該当なし	
		二巻		39紙中11該当なし残28紙該当なし	
		五巻		15紙中6紙該当なし残9紙該当なし	
1805（文化5年）	木曾名所図会（秋里蘿島・西村中和）	一卷		11写面中3写該当なし残8紙中該当	
		一卷②		16紙中1紙外残15紙中1紙	
		石	長浜八幡宮	佛教屋前廻縁一方形	
		六巻		16紙中3紙該当なし残13紙該当なし	
1811-51（嘉永4年）	紀伊国名所図会	初編 上		24紙中5紙該当なし残19紙該当なし	
		二編 二一		10紙中該当なしなし残8紙2紙該当	
		三編 三一		41紙中9紙該当なし1残32紙中1紙	
		板	大伴孔子古宅	式台よこ板	
		後編-五		47紙中15紙該当なし残32紙中2紙	
1831-1845（天保年間）	江戸名所図会	斎藤月岑	石	八景坂鎧掛松	方形 茶屋前
			石	瀬戸橋（鎌倉～金沢区）	方形一縁側（呉縁と中間）
		二巻	石	旅亭東屋	方形一縁側（呉縁と中間）
		石（不鮮）	瀬戸明神社鳥居前茅葺屋庭側	方形一縁側（不鮮明）	
		七巻	石	芭蕉庵	縁一自然（草鞋）
1844（天保15）	尾張名所図会	前編 一卷	前 一卷	46紙中3紙適合外 残43紙中2紙	
		石		桜天満宮	鍵型縁に沿い一自然（並び）
		前編 七巻	前 五巻	47紙中4紙適合外 残43紙該当なし	
	後編は明治期の可能性あり	後編 一卷	後 一卷	30紙中5紙適合外 残25紙中1紙	
		石		古人華溪遺図	縁一自然
1849（嘉永2）	善光寺名所図会	付録 6-8	付録 6-		
		一卷		21写面中5写該当なし残り16写の内	
		石			庵入口一自然
		二巻		25写面中10写該当なし残り15写の	
五巻	石	白鳥社	拝殿前-方形		

※表は主だった史資料一部のみを抜粋して表示

表 3. 沓脱板・沓脱石調査データベース（＜造園・茶書中心（17～20 世紀）＞

成立年	史資料名	作者・編者	沓脱石	沓脱板	絵的描写	配置
<b>16C</b>						
1594（文禄2）年	南坊録（抜粋）	南坊宗啓・	一		巻之七（滅後の巻）	踏をなほし（踏は履物のこと）
16C	江戸名所図屏風		石		吉祥寺	縁一石方形
16C	洛中洛外図（歴博甲本）		板		右 門一板一縁（畳・檜皮）	
			板		左 二中央 門一板一縁一畳	
<b>17C</b>						
1617（天和3年）	家屋雑考	沢田名垂	板		沓脱	こは糞子の内階の上へ平なる板を敷きおくなり、又階より一段低く設くるもあり、其造りさまざまと見えたり、東鑑、知家三条し、むかばきをつけながら南庭を得て直に沓解を昇り、ここにおいてむかばきをとき御座の傍らに参る云々などいふ事も見ゆ
1680（延宝8年）	庭石立様伝	存在せず				
1680（延宝8）年	余景造りの庭の図	菱川師宣	石		堀中門の内に	縁側一方形一飛石
			石		相生の庭	廻縁一自然形 ※奥方の御座 御簾・蔀格子有り
1694（元禄7）年	古今茶道全書		一巻	該当なし		
			二巻	該当なし		
			三巻	調揚踏段	越前太守之露地	開口一調揚踏段自然一飛石
			五巻	調揚踏段	一柳氏露地	開口一調揚踏段自然一飛石
元禄年間	諸国茶庭名跡図会		『古今茶道全書』第五巻と『余景作り庭の図』の人物を省いた内容		十五 堺町市住居露地数寄屋之図	「玄冠」と記載がある。
<b>18C</b>						
1701（元禄14年）	茶話指月集	久須見鶴巢（宗旦について茶を学んだ）	上		宗旦常に数寄屋を小座敷といひ、にじり上りをくぐり口といふ。	
			上		飛石三分の一程ひあがりたるをよとす。甚寒する時は水打すとも夏は涼敷やうにうちしめしたるよくくぐり口の石一つはぬらさぬが故実にて有也	
1704（宝永元年）	築山根元書		該当なし			
1733（享保18）	秘書庭之石ふみ		該当なし			
1735（享保20）年	築山庭造伝（前編）	北山援琴			客人島の石の事	山水の両の端に必二島あり、端近くある島を客人島といふなり。此島に客拜石、対面石、履脱石（りだつ／くつぬぎ）、隣宿石、水鳥岩などあり
		下	石		平易風雅體	草庵一廻縁一自然方形一飛石
	築山山水伝				行山水立石の図	客人島（対面石、或いは履脱
1737（元文2）	庭坪築形伝	本調査済み	存在せず			
1742（寛保2）	童子口伝書	本調査済み	内容『山水並野形図』			
1746（延享3）	桂御別業之記		石		御興寄	前に名高き遠州好みの真の飛石なり、御櫓の昇り口は大なる石あり、六人の畜を並べし故の遠州好みの真の飛石六つの沓脱という
1769（明和6）	庭石置様伝	本調査済み	存在せず			
1779（安永8）	築山之秘書	南村某	該当なし			
1790（寛政2）	庭山秘伝記	本調査済み	所在不明			
1792（寛政4）	庭造初段之伝	長板石酔	所在不明			
1797（寛政9年）	築山染指録	東睦和尚				踏躰石是レテアノ石ト云フ、切り石自然石共ニ用ヒ縁縁ヨリトリセテ、次アニノ石ト云フ、一ノ真中ニ付クヘシ、下リ又タセテ、次ノ石是レテアノ石ト云フ、初テ飛石ノ高サヲ用ユ、延石ヲ用ヒテモ苦シカラズ、左リ趾ニハ踏出シ右ニ寄テ右趾ナルハテニアルヘシ。是レ壹貳叁ノ古法ナリ、然基ノ壹ニ隨テ取捨一 履脱石 同断（客人島にありのこと）
1799（寛政11）年	無窓流治庭				山水役石居所之伝	
<b>19C</b>						
1817（文化14年）	北斎画本早引	葛飾北斎	該当なし			
1827（文政10）年	石組園生八重垣伝	秋里藤島	石		岩段沓抜組方	此のごとく岩組踏段は定法之真の飛石を居るにおなし、飛石踏み初めになる石を心信の二石を兼ねるの石を置くべし、真の飛石の形に略式を以て取り扱うとしるべし。
1827（文政10）年	珍説豹の巻	鼻山人作	石			伊豆八丈小松原の履脱石を据え
1828（文政11）年	築山庭造伝（後編）		上	調揚踏段	玉川庭図	戻縁一方形一飛石
			中	調揚踏段	中潜之庭之全圖	開口？（煎茶かも）の前一自然形一飛石
			中	調揚踏段	大村惣衛門書院之庭（富士川）茶	開口一調揚踏段一飛石
			中	石	大村惣衛門書院之庭（富士川）玄	縁側一自然形二石一延べ段
			中	石	挿絵	縁側一自然形一飛石（3石目まで）
			中	石	路地駄之造方之全図	縁側一自然形（二石）一飛石
明治期	庭前美景集	調査済み	所在不明			
18C初	絵本江戸土産	3編	石		竜岩寺庭一縁一方形単独	
		9編	石		青山梅之 縁一方形一飛石	

※表は主だった史資料一部のみを抜粋して表示

表 4. 描写・名称・記述の時系列一覧 (1/8)

成立年	史料科名		沓脱・履脱の 文字表記	沓脱板		沓脱石		願揚階段石	
		作者	記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
733-804唐	茶経								
813(元和8)-83	走筆謝孟議議寄新茶								
1011(寛弘8)	小右記		於 <sup>履脱</sup> 日給返置						
1012-1067宋	茶録								
1029(長元2)	列見并定考部類		余取孟昇從西面南間階 <sup>履脱</sup> 院下						
1069(延久元)	聖徳太子繪伝	泰到真		第一幅 桃花より青松を称す					
1069(延久元)	聖徳太子繪伝	泰到真		第四幅 用明天皇崩御					
1069(延久元)	聖徳太子繪伝	泰到真		厩前の誕生					
1069(延久元)	聖徳太子繪伝	泰到真		第六幅 甲斐国より黒駒を献す					
1069(延久元)	聖徳太子繪伝	泰到真		第九幅 味間之・伝楽を伝う					
1082-1135	大観茶論								
1091(寛治5)	後二条師通記		<sup>沓脱</sup> 下立次人披露之後						
1091(寛治5)	後二条師通記		昇(自)〔日〕 <sup>沓脱</sup> 、中行事下候						
1093(寛治7)	為房卿記		予昇自兼角 <sup>履脱</sup>						
1107(嘉承2)	中右記		(昇從 <sup>沓脱</sup> 、着南面之座掛如常、)						
1107(嘉承2)	中右記		(昇從 <sup>沓脱</sup> 、着南面座掛如常、)						
1165(永万1)	年中行事繪卷			開巻					
1165(永万1)	年中行事繪卷			中門廊					
1165(永万1)	年中行事繪卷			侍廊					
1165(永万1)	年中行事繪卷			西門中門					
1165(永万1)	年中行事繪卷			真言院					
1165(永万1)	年中行事繪卷			女房の住まい、					
1167(仁安2)	平家納経巻口絵			持佛堂					
1167(仁安2)	黒昧記	左大臣・藤原(三条)実房	召使奏報、 <sup>沓脱</sup> 席上、						
1168(仁安3)	黒昧記	左大臣・藤原(三条)実房	右大弁等下居 <sup>沓脱</sup>						
1170(嘉応2)	黒昧記	左大臣・藤原(三条)実房	修理大夫脱着於 <sup>沓脱</sup> 上						
1170(嘉応2)	黒昧記	左大臣・藤原(三条)実房	脱着於 <sup>沓脱</sup> 上、是常事也						
1179(治承3)	壬生家古文書				<sup>沓脱</sup> 板一枚<長一丈一尺四寸半>				
1179(治承3)伝	伴大納言縁起繪卷			左大臣邸					
12C中頃	信貴山縁起繪卷			山崎長者の屋敷					
12C中頃	信貴山縁起繪卷			住房					
12C後半	粉河寺縁起繪卷			輩行者の来訪/奇端を妻に告げる衆師					
12C後半	粉河寺縁起繪卷			輩行者に会う長者					
12C後半	扇面古写経			タイトル不明					
1202(建仁2)	猪隈閑白記		下官昇南面 <sup>沓脱</sup> 参御車簾						
1202(建仁2)	猪隈閑白記		下自南面 <sup>沓脱</sup> 、立南庭						
1202(建仁2)	猪隈閑白記		自余昇自 <sup>沓脱</sup> 也						
1214(建保2)	暇茶養生記	荣西							
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			5紙					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			14紙 庭に面する					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			25紙					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			19紙					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			19紙 朱雀院					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			30紙 紅梅殿					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			32紙 北の対					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			36紙 紀長谷雄邸					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			16紙 尊意 僧正の法性房					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			26紙 朱鏡り					
13C初(伝1219)	北野天神縁起繪卷			26紙					
1226(嘉禄2)	明月記		昇 <sup>沓脱</sup> 入妻戸申之、自内 <sup>沓脱</sup>						
1226(嘉禄2)	民経記		<sup>沓脱</sup> 下(二)有(ツル)物						
1226(嘉禄2)	民経記		昇 <sup>沓脱</sup> (乍着沓、)						
1226(嘉禄2)	民経記		予昇 <sup>沓脱</sup> 着端殿上人座						
1227(安貞1)	民経記		至殿上西一間東畔昇 <sup>沓脱</sup>						
1227(安貞1)	民経記		又殿上人座田東端 <sup>沓脱</sup> 又可昇之道也						
1227(安貞1)	民経記		脱着於 <sup>沓脱</sup>						
1228(安貞2)	民経記		次二拜、昇中門 <sup>沓脱</sup>						
1228(安貞2)	民経記		経往東昇 <sup>沓脱</sup> 着西第一						
1228(安貞2)	民経記		次於 <sup>沓脱</sup> 着沓出神仙						
1228(安貞2)	民経記		経往東昇 <sup>沓脱</sup> 着西第一間						
1228(安貞2)	民経記		次返給出納、次於 <sup>沓脱</sup> 着沓出神仙						
1228(安貞2)	民経記		次於 <sup>沓脱</sup> 着沓出神仙・無名門						
1228(安貞2)	民経記		<sup>沓脱</sup> 前也						
1231(寛喜3)	民経記		婦入昇 <sup>沓脱</sup> 参朝餉奏事由						
1231(寛喜3)	民経記		参入昇北侍廊 <sup>沓脱</sup>						
1231(寛喜3)	民経記		範頼於中門廊 <sup>沓脱</sup> 着沓下立庭上						
1231(寛喜3)	民経記		自内侍所北面妻戸前 <sup>沓脱</sup> 所昇参也						
1231(寛喜3)	民経記		府院昇西面 <sup>沓脱</sup>						
1233(天福1)	民経記		<sup>沓脱</sup> 下脱着了						
1233(天福1)	民経記		於 <sup>沓脱</sup> 下弁侍取沓直裾						
1233(天福1)	民経記		<sup>沓脱</sup> 下脱着了						
1233(天福1)	民経記		於 <sup>沓脱</sup> 下弁侍取沓直裾						
1233(天福1)	民経記		<sup>沓脱</sup> 下脱着						
1233(天福1)	民経記		於 <sup>沓脱</sup> 下小弁人取沓						
1233(天福1)	民経記		於 <sup>沓脱</sup> 上脱着、						
1233(天福1)	民経記		自 <sup>沓脱</sup> 下立前庭、						
1233(天福1)	民経記		予参進昇 <sup>沓脱</sup> 、於其所脱沓						
1233(天福1)	民経記		殿并納言殿於 <sup>沓脱</sup> 上全脱御了						
1233(天福1)	民経記		妻戸添掛、昇 <sup>沓脱</sup> 脱沓						
1233(天福1)	民経記		到于 <sup>沓脱</sup> 下一揖、登 <sup>沓脱</sup> 、(脱沓)						
1233(天福1)	民経記		到于 <sup>沓脱</sup> 下一揖、登沓脱、						
1233(天福1)	民経記		向 <sup>沓脱</sup> 又一揖、自下隔次第退						
1235(嘉禎1)	民経記		昇西面南第一間 <sup>沓脱</sup>						
1235(嘉禎1)	民経記		於 <sup>沓脱</sup> 着沓参堂						

成立年	史料名	作者	沓脱・履脱の 文字表記	沓脱板		沓脱石		晒揚踏段石	
			記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1237(嘉禎3)	民経記		昇西面沓脱入布障子						
1238(暦仁1)	民経記		次昇中門沓脱申事由						
1238(暦仁1)	民経記		至沓脱下著沓加本列、						
1238(暦仁1)	民経記		自中門廊沓脱令昇堂上給、						
1242(仁治3)	民経記		廊沓脱						
1242(仁治3)	民経記		於沓脱下著沓給						
1242(仁治3)	民経記		徹縁構沓脱						
1242(仁治3)	民経記		沓脱上脱沓						
1242(仁治3)	民経記		欲下中門沓脱給之处						
1242(仁治3)	民経記		昇新造中門廊沓脱						
1245(寛元3)	民経記		於沓脱上脱沓						
1251(建長3)	關屋閣白記		昇自東面切妻沓脱						
1251(建長3)	關屋閣白記		昇自子午廊南面沓脱						
1251(建長3)	關屋閣白記		昇自東面切妻沓脱						
1255(建長7)	深心院閤白記		入同戸昇同第二間沓脱、(於沓脱下先掛、)						
1255(建長7)	深心院閤白記		入同戸昇同第二間沓脱、(於沓脱下先掛、)						
1262(弘長2)	九条家歴世記録		(於沓脱下掛、昇沓脱脱沓、懸膝着座掛、)						
1262(弘長2)	九条家歴世記録		(於沓脱下掛、昇沓脱脱沓、)						
1262(弘長2)	九条家歴世記録		於中門外沓脱着靴						
1269-1350	喫茶往來								
1269南宋	茶具図贊								
1276(建治2)	経俊卿記		實子沓脱着円座						
1278(弘安1)	松崎天神縁起			1-4 菅原長善邸					
1278(弘安1)	松崎天神縁起			2-17 紀長谷雄邸					
1278(弘安1)	松崎天神縁起			5-6 北野社 社僧房					
1289(正応2)	作庭記								
1291-1360	石山寺縁起絵巻			閤白九条邸					
1295(永仁3)	伊勢新名所絵歌合			祭主館					
1298(永仁6)	東征伝絵巻			唐招提寺僧房「鑑真的死告」					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					善光寺入った僧房			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					善光寺僧房			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					善光寺外の僧房			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					鹿兒島正八幡宮 拜殿前			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					備前国 藤井政所邸 庭側縁			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					伊豆三島大社前 僧房			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					下野国 小野寺境内			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝					倉敷輕部の里 教願住房			
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			肥前国 華台上人邸					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			大宰府 聖達上人邸					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			京都 因幡堂道扶んだ邸					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			信濃(佐久)小田切の里武士の館					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			佐久群 武士大井太郎邸					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			兵庫 加古川市野口 教信寺					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			奈良 当麻寺曼陀羅堂					
1299(正安1)	一遍上人聖絵伝			尾張甚目寺					
13C中	地藏菩薩靈驗記			28紙 福智院(奈良)					
13C中	地藏菩薩靈驗記			33紙 地藏堂					
13C中	駒騎行幸絵巻			1紙 高陽院殿					
13C後半	西行物語絵巻			6紙 義清邸裏門					
13C後半	西行物語絵巻			10紙 嵯峨の聖の僧房					
13C後半	西行物語絵巻			14紙 藤原為隆邸 中門廊					
13C後半	西行物語絵巻			17紙					
13C後半	西行物語絵巻			16紙 脚のない板					
13C後半	西行物語絵巻			5紙 自邸					
13C後半	西行物語絵巻			14紙 旧知邸					
13C後半	西行物語絵巻			18紙 娘の家					
13C後半	西行物語絵巻			2紙 広沢池畔庵					
13C後半	西行物語絵巻			7紙 熊野湊入堂					
13C後半	西行物語絵巻			10紙 妻戸前					
13C後半	西行物語絵巻			24紙 聖の他界					
13C後半	西行物語絵巻			25紙 西行の汎					
13C後半	西行物語絵巻			27紙 高野山					
13C後半	住吉物語絵巻			10紙 姫君邸の門前					
13C後半	住吉物語絵巻			3紙 書院					
13C後半	住吉物語絵巻			6紙 姫君対屋東面					
13C後半	住吉物語絵巻			2紙 釣殿					
13C後半	小野雪見御幸絵巻			22紙 寝殿西南					
13C後半	小野雪見御幸絵巻			27紙 寝殿西側					
13C後半	小野雪見御幸絵巻			30紙 廂の間					
13C後半	山王靈驗記			7紙 閤白頼通邸					
13C	阿弥陀二十五菩薩来迎図			門一板一縁一畳					
13C	山水抄								
13C	直幹申文絵詞			東/門正面/妻戸/畳					
1302(乾元1)	実躬卿記		挿頭台等於中門内沓脱上						
1303(嘉元1)	実躬卿記		至沓脱下掛、更昇沓脱						
1303(嘉元1)	御産部類記		雅俊朝臣降南面沓脱						
1304(嘉元2)	実躬卿記		諸司數數沓脱						
1305(嘉元3)	実躬卿記		此間公卿等北面、沓脱						
1305(嘉元3)	実躬卿記		公卿候沓脱						
1305(嘉元3)	実躬卿記		自沓脱昇著円座						
1305(嘉元3)	実躬卿記		助範取之昇自中門沓脱						
1306(徳治1)	実躬卿記		置中門切妻、沓脱西端敷						
1306(徳治1)	実躬卿記		此間予昇自西沓脱						
1307(徳治2)	法然上人絵伝			肥後 阿闍梨皇円 功德院					

成立年	史料名		沓脱・履脱の 文字表記	沓脱板		沓脱石		囃場踏段石	
	▼ 作者			描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1307(徳治2)	法然上人絵伝			肥後 阿闍梨皇円 功德院					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			奈良 法相宗の大家 藏俊僧都邸					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			醍醐寺 権律師寛雅の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			仁和寺 御室御所 法親王対面					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					法然の住房 変形中門廊南			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			中川寺 阿闍梨実範の僧房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			法然の僧房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					法然の家			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			法然の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			中門入り北側廊に備わる					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			御所法皇の臨終					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			藤原基房 関白 月輪殿					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			経宗邸					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			藤原範光邸					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			大宮の内府邸 実宗公					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			聖護院					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			法然の吉水の房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					法然 吉水の庵室			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			大原 勝林院坊					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			慈鎮和尚の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			慈鎮の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			天王寺の境内					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			但馬宮					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			聖覚邸(文暦2年)					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			日光の別当僧正の房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			19-20 仁和寺 尼の房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			20-22 作仏房の住まい					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			21-11 法然吉水の房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			23-18 法然の庵室					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			23-20 法然の庵室					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			24-6 法然の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			24-19 伊豆 走湯場 尼妙庵					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			25-6 法然の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			27-4 月輪殿 関白兼実					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					27-24 熊谷入道蓮生の屋形			
1307(徳治2)	法然上人絵伝					29-4 法然の住房			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			29-9 兵部卿三位平基親邸					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					29-12 法然の住房			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			31-11 法然の房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			32-26 法然と聖覚対面					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			33-9 左少弁藤原某邸					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			33-14 法然の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			36-6 摂津国民家					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			38-4 藤原兼隆邸(夢)牌蛙置					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			40-8 禅林寺近く 公胤僧正の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			41-14 西林寺の僧正承円の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					41-16 明禅の住居			
1307(徳治2)	法然上人絵伝			42-24 二尊院(2つ並び) ※					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			44-11 来迎堂					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			45-20 法然が夢枕に					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			46-7 肥後国 住生院					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			46-23 東山赤築地の僧房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			47-4 法然の庵室					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			48-4 法性寺					
1307(徳治2)	法然上人絵伝			48-8 法然の住房					
1307(徳治2)	法然上人絵伝					48-9 建春門院御所			
1309(延慶2)	春日権現験記絵			3-6 藤原俊盛の邸					
1309(延慶2)	春日権現験記絵			5-4 春日大社					
1309(延慶2)	春日権現験記絵			6-5 親宗の邸					
1309(延慶2)	春日権現験記絵			7-10 藤原隆李の邸					
1309(延慶2)	春日権現験記絵			13-6 興福寺 南院					
1310(延慶3)	御産部類記		雅任朝臣降沓脱						
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻			上-9 良忍の住房					
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					上-9 良忍の住房			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					上-13 良忍 大原の庵室			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻			上-13 良忍 大原の庵室					
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					下-6 大原の庵室			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					下-10 大原の庵室			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					下-18 大原の庵室			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻					下-23 青木の尼公の庵室			
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻			下-23 青木の尼公の庵室					
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻			下-36 武蔵国与野郷の名主の屋敷					
1314(正和3)	融通念仏縁起絵巻			下-38 同上の娘の家					
1317(文保1)	志度寺縁起絵巻					讃州志度同上縁起			
1321(元応3)	醍醐寺		経中門ノ外ノ縁ヲ、下自履脱						
1321(元応3)	醍醐寺		於履脱ノ縁ノ上ニ						
1329(嘉暦4)	信濃諏訪上社文書		不開妻戸、御坐沓脱						
鎌倉時代	山崎架橋図		経中門西縁下自沓脱						
14C初	稚児観音縁起絵巻			10紙 住房					
14C初	土蜘蛛草紙			3紙 神楽岡の廃屋					
14C初	土蜘蛛草紙			5紙 上に同じ					
14C	大江山絵詞			2紙 内裏 朱塗の板					
14C	絵師草紙			16紙					
1338(暦応1)	中院一品記		於履脱ノ縁ノ上ニ						



成立年	史料名	香脱・履脱の文字表記	香脱板		香脱石		囃場階段石	
		記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1341(暦応4)	中院一品記	浅履、於香脱下揖						
1351(観応2)	幕帛絵詞		1-16 澄海の房					
1351(観応2)	幕帛絵詞		2-6 右府僧 浄珍の居室邸					
1351(観応2)	幕帛絵詞		2-21 僧房					
1351(観応2)	幕帛絵詞		4-9 親鸞の閑居					
1351(観応2)	幕帛絵詞				5-4 鎌倉唯善房の屋敷			
1351(観応2)	幕帛絵詞		5-8 広壮な屋敷					
1351(観応2)	幕帛絵詞				8-9 竹杖庵			
1351(観応2)	幕帛絵詞		8-14 竹杖庵 主 宗昭の閑居					
1351(観応2)	幕帛絵詞		9-33 某の僧都「七十有余」の高徳					
1351(観応2)	幕帛絵詞		10-23 宗昭の病室					
1356(延文3)	後深心院閑白記	先跪香脱上						
1370(応安3)	後愚昧記	主人下中門内香脱之時						
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-6 佐泊家 正面					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-6 佐泊家 側面					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-7 馬屋裏					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-7 母と眠る大師					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-7 母と眠る大師					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-21 京 大師 修学					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		1-26 石淵の勤操 僧正の屋敷					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		2-4 植尾の山寺(施福寺)大師得度式					
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞				2-26 修繕寺(東石なし)			
1374-1389(応永2)	弘法大使行状絵詞		4-3 中国東塔院((現)青龍寺跡)					
1376(永和2)	勸修寺家旧蔵記録	於殿上東間香脱下一揖						
1376(永和2)	三宝院文書	切妻香脱際ヨリ堂前階際マテ引満之						
1376(永和2)	三宝院文書	自中門切妻香脱下立礎道、						
1376(永和2)	三宝院文書	切妻香脱左右砌際立礎畢						
1376(永和2)	三宝院文書	扈從ハ早々ニ経東縁下立香脱東端						
1376(永和2)	三宝院文書	大阿闍梨下御香脱之時、						
1376(永和2)	三宝院文書	縁下立香脱東端						
1376(永和2)	三宝院文書	大阿闍梨下御香脱之時						
1377(天授3)	華頂要略	自南妻戸前香脱下庭上						
1377(天授3)	華頂要略	然後登自香脱入中門南妻戸、						
1377(天授3)	華頂要略	申次房官如前経中門西縁下自香脱						
1377(天授3)	華頂要略	畢申次登自西香脱						
1382(永徳2)	実冬公記	然後登自香脱入中門南妻戸						
1387(嘉慶1)	実冬公記	畢申次登自西香脱						
1395(応永2)	綾織流庭古法秘伝之書	真の庭図：対面 履脱			真の庭図：対面	真の庭図：対面 履脱		
1395(応永2)	実冬公記	縁仮儲香脱						
1395(応永2)	実冬公記	主人可出間、南香脱際北引幔						
1395(応永2)	実冬公記	予起座、降香脱、前駆献香						
1395(応永2)	実冬公記	昇香脱揖、著座揖、帰出間						
15C初	福富草紙				香脱板と重なる石			
15C初	福富草紙		香脱の石と重なる板/履物					
1410(応永17)	醍醐寺	立帰自中門東向香脱登立、鼻広脱香脱下						
1410(応永17)	醍醐寺	大童子取帰自中門東向香脱登立、						
1410(応永17)	醍醐寺	鼻広脱香脱下						
1410(応永17)	醍醐寺	即立帰自向香脱降向						
1410(応永17)	醍醐寺	綱所自香脱下着草鞋登立						
1410(応永17)	醍醐寺	綱所登香脱、於砌下着草鞋、入車寄妻戸						
1420(応永27)	薩戒記	納言起座下香脱着香						
1421(応永28)	薩戒記	下香脱(兼合置香)						
1422(応永29)	薩戒記	直到中門廊外香脱下						
1422(応永29)	薩戒記	又帰入中門、昇切妻戸、下香脱着香						
1422(応永29)	薩戒記	出神仙門、立香脱前、揖昇香脱脱香						
1422(応永29)	薩戒記	出神仙門、立香脱前、揖昇香脱脱香						
1422(応永29)	薩戒記	昇高遣戸代香脱也者						
1425(応永32)	薩戒記	於香脱下地上脱香						
1425(応永32)	薩戒記	閑白答揖、□□香脱□□□□前南面立						
1425(応永32)	薩戒記	於神仙門可見香脱之由有其説						
1425(応永32)	薩戒記	下臈頭於神仙門昇香脱事連綿例也						
1425(応永32)	薩戒記	(或下臈頭於神仙門昇香脱也						
1425(応永32)	平治物語絵巻常葉巻				6紙 中宮御所 勝手口			
1425(応永32)	平治物語絵巻常葉巻				6紙 中宮御所 勝手口			
1425(応永32)	平治物語絵巻常葉巻		7紙 中宮御所 正面					
1426(応永33)	薩戒記	於香脱下揖、昇香脱脱香						
1426(応永33)	薩戒記	(此所引掲、)於香脱下揖、昇香脱脱香						
1426(応永33)	薩戒記	下香脱着香、出神仙・無名等門向陣、直被着端座						
1426(応永33)	薩戒記	昇香脱之時						
1426(応永33)	薩戒記	昇香脱、昇香脱之時						
1426(応永33)	薩戒記	於地上脱香、昇香脱						
1426(応永33)	薩戒記	乍着脱[香]不可昇香脱之由						
1426(応永33)	薩戒記	予乍着香昇香脱之由、						
1426(応永33)	薩戒記	予乍着香昇香脱						
1426(応永33)	薩戒記	又納言昇香脱之儀						
1426(応永33)	薩戒記	昇香脱脱香之儀、異一昨日儀						
1426(応永33)	薩戒記	昇香脱今[々]香口口若失念賊						
1426(応永33)	薩戒記	昇香脱之時						
1426(応永33)	薩戒記	仍予於香脱上不着履						
1426(応永33)	薩戒記	本儀件座高有香脱之由						
1426(応永33)	薩戒記	〈仍無香脱、只平敷座也、						
1428(正長1)	建内記	帰家於香脱上向北以水洗足						
1428(正長1)	薩戒記	於香脱下揖、昇香脱、脱香昇殿上						
1428(正長1)	薩戒記	撰政昇中門廊外香脱						

成立年	史料名	作者	省脱・履脱の 文字表記	省脱板		省脱石		欄揚階段石	
			記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1428(正長1)	薩戒記			く、藤大納言以下昇東方省脱、)					
1428(正長1)	薩戒記			下省脱着査、退出殿上ロ戸					
1429(永享1)	薩戒記			掛昇直廬南面東方省脱西第二間					
1429(永享1)	建内記			自東面良角省脱内々昇之					
1429(永享1)	建内記			持笏、昇省脱之時有掛					
1429(永享1)	薩戒記			自立節東方昇省脱					
1429(永享1)	薩戒記			経立節東方、昇省脱着座					
1430(永享2)	建内記			退下省脱之下					
1430(永享2)	建内記			一掛昇省脱					
1430(永享2)	建内記			次昇中門外省脱					
1430(永享2)	建内記			着査、向省脱一掛、					
1430(永享2)	建内記			次昇中門外省脱					
1430(永享2)	看聞日記			省脱登給之時、予極(縁)					
1430(永享2)	看聞日記			申礼、客人省脱下之時予庭上(二)下、					
1431(永享3)	看聞日記			自中門省脱昇					
1432(永享4)	九条家歴世記録			階下省脱両方ニ二三所ツツと申之					
1435(永享7)	看聞日記			対面、(昇省脱候、)					
1436(永享8)	看聞日記			候省脱					
1441(嘉吉1)	建内記			子候台盤所前省脱辺了					
1443(嘉吉3)	建内記			着朝衣立省脱之下					
1443(嘉吉3)	建内記			於省脱申承了					
1444(文安1)	建内記			於省脱下一掛、昇省脱脱着					
1444(文安1)	建内記			於省脱下一掛、昇省脱脱着、縣口昇長押					
1444(文安1)	建内記			外・省脱前・大門前等敷砂					
1444(文安1)	建内記			先於省脱下一掛、昇省脱脱着					
1444(文安1)	建内記			先於省脱下一掛、昇省脱脱着					
1444(文安1)	建内記			昇殿上省脱脱着					
1444(文安1)	建内記			徳之降自殿上省脱入神					
1444(文安1)	建内記			壁中門等昇中門前省脱					
1444(文安1)	建内記			次自省脱昇殿上					
1450(宝徳2)	建内記			中門外省脱					
1459(長祿3)-1	珠光古市播磨法師宛	記載なし							
1466(文正1)	山水並び野形図								
1492(明応1)	九条家歴世記録			於殿上省脱上掛					
1492(明応1)	九条家歴世記録			巻(テ)省(ヲ)脱(ケ)口口下膝					
1496(明応5)	秘本作庭伝			-					
1500(明応9)	九条家歴世記録			次第三進省脱辺一掛					
1523(大永3)	勸修寺聖教			仍傍省脱用意					
1523(大永3)	勸修寺聖教			於省脱請取之					
1523(大永3)	菅別記			出神仙門、昇省脱、各着					
1524(大永4)	禁中御八講見聞記			陣座ヨリ省脱ノ下マテ鼻高用之					
1524(大永4)	禁中御八講見聞記			省脱ノ下ニ座ヨリ省脱ノ下マテ鼻高用之					
1524(大永4)	禁中御八講見聞記			省脱ノ下ニテ草鞋用之					
1524(大永4)	禁中御八講私記			前ノ省脱マテ鼻広					
1525(文永5)	長歌茶湯物語								
1554(天分23)-	鳥鼠集								
1568(元禄10)	分類草木								
足利時代	鐙師				鐙師				
15C	芦引絵				1-26 白河知人の家				
15C	芦引絵				1-33 白河知人の家				
15C	芦引絵				1-41 白河知人の家				
15C	芦引絵				2-10 東大寺 東南院の僧都の房				
15C	芦引絵				2-27 1-22と同じ邸				
15C	芦引絵					3-8 君の房 自然石			
15C	芦引絵				3-48 京 父朝臣の家				
15C	芦引絵				4-23 覺然上座の宿房				
不明	座敷と庭の起絵図								
1572(元龜3)	習見聽診集								
1575(天正3)	永禄一品御記			自高遣戸省脱					
1576(天正4)	酒茶論								
1582(天正10)	無上立次第								
1582(天正10)	棧敷へ入次第之事								
1586(天正14)	山上宗二記	記載なし							
1594(文禄2)	南坊録(抜粋)								
16C	天橋立・富士三保松原図屏風				廻縁一板(開い有り)				
1600(慶長5)	九条家歴世記録			次出公卿座裏戸、降自省脱					
1600(慶長5)	九条家歴世記録			乍寄於省脱昇小板敷令着殿上奥座					
	403	12	188	163	1	31	1	0	0
16C	江戸名所図屏風					吉祥寺			
16C	洛中洛外図(歴博甲本)			右 門一板一縁(畳・櫓皮)					
16C	洛中洛外図(歴博甲本)			左 ニ中央 門一板一縁一畳					
16C	洛中洛外図(歴博甲本)			左 ニ中央 中門入った建物 縁一板					
1620(元和6)-1	茶譜								右ニシリ上ト云コト
1640(寛永17)-	南坊録(伝)								御着所
1646(正保3)	山水可致抄						対面石	履脱ノ石アリ	
1670(寛文10)	座敷庭石山水伝								
1678(延保6)	吉原戀の道引					庭側縁一自然(履物)			
1680(延宝8)	庭石立様伝								
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				塀中門の内に			
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				唐様の庭			
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				公卿職鞆の図			
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣			隅田川を模した庭				
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				藤棚の庭			
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				来迎の庭			



成立年	史資料名		香脱・履脱の 文字表記	香脱板		香脱石		隅揚踏段石	
		作者	記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				岩屋の流			
1680(延宝8)	余景造り庭の図	菱川師宣				相生の庭			
1688(元禄頃)	若衆			玄関一縁一板					
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵				駿州義元公露地庭之図			
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					茶四 九十四 躰口展開図		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					駿州義元公露地庭之図		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					聚楽法下飛露地敷寄屋之図		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					紹鳴之指南平野露地		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					京極安和鷺池		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					加藤肥後守殿		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					越前太守之露地		
1694(元禄7)	古今茶道全書	紅染山鹿庵					一柳氏露地		
17C頃	露地躰書								にじり上りの石は
17C	厳島・天橋立屏風					石(木箱の可能性あり)			
1701(元禄14)	諸国茶庭名跡図会						宗匠名人之路地庭之事併書院之飛石付様之		対面石 座敷の前にふすへし
1701(元禄14)	茶話指月集								にじり上りくぐり口といふ。
1704(宝永元)	築山根元書								
1725(享保10)	町方書上					伊豆磯などの石の	踏段石所持什り候		
1733(享保18)	秘書庭之石ふみ								
1735(享保20)	築山庭造伝(前編)					西芳寺	対面石・履脱石(りだつ/くつぬぎ)		
1735(享保20)	築山庭造伝(前編)					清細閑雅體			
1735(享保20)	築山庭造伝(前編)					平易風雅體			
1735(享保20)	築山庭造伝(前編)						北野松林寺 函養幽情體 金森宗和		
1735(享保20)	築山庭造伝(前編)						静想無礙體		
不明	築山山水伝(相阿弥築山山水伝)					行山水立石の図	客人鳥(対面石、或いは履脱)		
1737(元文2)	庭坪築形伝								
1742(寛保2)	童子口伝書								
1746(延享3)	桂御別業之記						瀧州好みの真の飛石六つの香脱という		
1769(明和6)	庭石置様伝								
1779(安永8)	築山之秘書								
1780(安永9)	都名所図会					本願寺花畑横建物前			
1780(安永9)	都名所図会					西大谷東所脇之閣			
1780(安永9)	都名所図会					金玉山雙林寺下建物			
1780(安永9)	都名所図会					安養寺二階建て入口			
1780(安永9)	都名所図会					知恩寺(百万遍)本堂横建物前			
1780(安永9)	都名所図会					銀閣寺①心空殿脇			
1780(安永9)	都名所図会					銀閣寺②東〇堂前庭に向けて			
1780(安永9)	都名所図会					銀閣寺③客殿庭に向けて			
1780(安永9)	都名所図会					銀閣寺④客殿庭に向けて			
1780(安永9)	都名所図会					赤山社本社前にある建物前			
1780(安永9)	都名所図会					八瀬蘆風呂			
1780(安永9)	都名所図会					往生院			
1780(安永9)	都名所図会					三〇院			
1780(安永9)	都名所図会					厭離庵			
1780(安永9)	都名所図会					大龍寺方丈庭向き			
1780(安永9)	都名所図会					小嵐山十輪寺本堂横建物前			
1780(安永9)	都名所図会					下島羽恋塚寺			
1780(安永9)	都名所図会					竹田北向不動院 西行寺前			
1780(安永9)	都名所図会			欣浄寺 本堂前					
1780(安永9)	都名所図会					日野 薬師			
1780(安永9)	都名所図会					市原小町寺 正面			
1780(安永9)	都名所図会					市原小町寺 庭向き			
1780(安永9)	都名所図会					八藍岡			
1780(安永9)	都名所図会					今宮社 社司前			
1787(天明7)	拾遺名所図会					俊成卿社			
1787(天明7)	拾遺名所図会					大雅堂			
1787(天明7)	拾遺名所図会					島辺山 本寿寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					山科十禅寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					地藏寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					本真如堂			
1787(天明7)	拾遺名所図会					干菜寺・青龍寺・武蔵寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					靈鑑寺・如意寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					金福寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					金福寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					葉山観音			
1787(天明7)	拾遺名所図会					貫徳寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					大原			
1787(天明7)	拾遺名所図会					圓通寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					圓通寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					細谷 祥鳳山直指庵			
1787(天明7)	拾遺名所図会					車折明神社			
1787(天明7)	拾遺名所図会					鹿王院			
1787(天明7)	拾遺名所図会					永正寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					真経寺・興隆寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					嘉祥寺			
1787(天明7)	拾遺名所図会					桓武天皇陵			
1787(天明7)	拾遺名所図会					春日社			
1787(天明7)	拾遺名所図会					願成寺			
1788(天明8)	唐松園権紫宸殿・清涼殿格子等事勘	殿下直盧階并香脱事							
1790(寛政2)	庭山秘伝記								
1792(寛政4)	庭造初段之伝								
1794(寛政6)	住吉名勝図会					天下茶屋			
1794(寛政6)	住吉名勝図会					新家三丈字屋之図			
1794(寛政6)	住吉名勝図会					紀義定邸			

成立年	史資料名	春脱・履脱の 文字表記	春脱板		春脱石		蹟揚路段石	
	▼ 作者	記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1794(寛政6)	住吉名勝図会				住吉のおへらひと			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				天下茶村			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				天下茶村			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				住吉新家			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				住吉新家			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				住吉新家			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				住吉新家			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				遠里小野			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				今翠堂			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				安井天神山			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				安井天神山			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会		江口君					
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				二弁			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				多用入湯			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				多用入湯			
1796(寛政8-10)	撰津名所図会				丹生山田東村			
1796(寛政10)	戸山荘図巻稿本・下				正面縁一方形			
1797(寛政9)	伊勢参宮名所図会				古市			
1797(寛政9)	伊勢参宮名所図会				西行谷			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				相国寺 枯光院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				大徳寺 如意庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				寸松庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				建仁寺 正博院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				妙庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				靈洞院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会		東本願寺 林泉天橋立					
1799(寛政11)	都林泉名勝図会		桂宮					
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				東寺			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				銀閣寺 音閣			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				集芳軒			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				光雲寺			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				南禅寺 聴松院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				金地院堂			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				円山 多蔵庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				円山 多蔵庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				〃 延喜庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				〃 勝興庵(その2)			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				〃 勝興庵(その3)			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				相(雙)林寺 長喜庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				〃 文阿弥			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				霊山叔阿弥			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				霊山叔阿弥			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				実生院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				延令院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				清水滝下南蔵院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会		伏見 龍徳庵					
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				高雄 地藏院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				高山寺 三尊院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				龍安寺 大珠院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				花園輔仁親王山亭			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				妙心寺 海福院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				潘桃院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				退蔵院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				真桑院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				嵯峨小督の家			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				天龍寺 真桑院			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				松花堂			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				妙喜庵			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				京屋 弥生興			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				京屋 弥生興			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				藤屋 月興			
1799(寛政11)	都林泉名勝図会				南屋			
1797(寛政9)	築山染指録	東睦和尚				踏壇石はレワーノ石ト云フ		
1797(寛政9)	東海道名所図会				琉人泊			
1797(寛政9)	東海道名所図会				三州牛久保			
1797(寛政9)	東海道名所図会				連歌師			
1799(寛政11)	無窓流治庭							廻り口の踏石高
1799(寛政11)	無窓流治庭							廻り口の踏み石
1799(寛政11)	無窓流治庭				一 履脱石 同断(客人島にありのこと)			
1800(寛政12)	大和名所図会				2面			
1800(寛政12)	大和名所図会				簡井			
1800(寛政12)	大和名所図会				岸福の后			
1800(寛政12)	大和名所図会				古今集秋			
1800(寛政12)	大和名所図会				玄實庵			
1800(寛政12)	大和名所図会				壬二集			
1800(寛政12)	大和名所図会				みよしの			
1800(寛政12)	大和名所図会		みよしの					
江戸期	芒苅頭		そこは春脱といふて一の下座じゃ					
18C	池田之宿図屏風			正面縁一板※2つ隣合わせ				
1805(文化5)	木曾名所図会				長浜八幡宮			
1805(文化5)	木曾名所図会				臨川寺方丈前			
1811-51(嘉永4)	紀伊国名所図会			吹上の長者の館				
1811-51(嘉永4)	紀伊国名所図会				夾山			

成立年	史資料名	作者	香脱・履脱の文字表記	香脱板		香脱石		贈揚踏段石	
				描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述	描写(画)	名称・記述
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					灰山			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					年始 猿引きの図			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					園光大師			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					八幡宮 慈光寺 元亨寺			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					弓天神社 内天神社			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					弓天神社 内天神社			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					その三			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					閑居			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					鈴木三師の宅			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					宗祇法師閑居			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					後白河法皇			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会			大伴孔子古宅					
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					末蔵院			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					冷泉 芥折院			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会			黄門邸					
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					藤滝			
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会			久米君の図					
1811-51(嘉衡4)	紀伊国名所図会					その三			
1827(文政10)	石垣園生八重垣伝	秋里薩島				飛石香枝五ヶ之伝	是を香枝といふ。		
1827(文政10)	石垣園生八重垣伝	秋里薩島				岩段香枝組方	此のごとく岩組踏段は定法之真の飛石を居るにおなし		
1827(文政10)	石垣園生八重垣伝	秋里薩島				横勝手踏段	横勝手より段は居間或いは掃除伝い等の踏段に用ゆ。		
1827(文政10)	石垣園生八重垣伝	秋里薩島				真之脱履石之圖	心信の二石をもつて香ぬき踏段石といふ。		
1827(文政10)	石垣園生八重垣伝	秋里薩島				略式踏段	略伝踏段		
1827(文政10)	珍説豹の巻	鼻山人					小松原の履脱石を据ゑ		
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						定式茶庭全図	贈揚踏段石へ石なり
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						玉川庭図	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						中潜之庭之全圖	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						大村惣衛門書院之庭(富士川)茶室	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						駿河国富士大宮町大宮司のお茶室	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						泉州堺五貫屋町藤井某之庭	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島				大村惣衛門書院之庭(富士川)玄閣			
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島				押絵			
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島				路地庭之図	是は定式の香脱踏段		
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島						路地軒之造方之全図	
1828(文政11)	築山庭造伝(後編)	秋里薩島				万歳相生之庭相亦滝口之庭相といふ			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					八景坂廻掛松			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					瀬戸橋(鎌倉～金沢区)			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					放亭東屋			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					瀬戸明神社島居前茅葺庭側			
1831(天保1)-1	江戸名所図会			麻布菩提寺開山了海上人誕生図					
1831(天保1)-1	江戸名所図会					雲雲山蟠龍寺弁天横建屋			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					竜岩寺庭①茅葺小建屋前			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					竜岩寺庭②茅葺大建屋前			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					護国寺裏伝鬼子母神出現の地			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					平林寺摩羅横建屋			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					飛鳥橋料亭①			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					飛鳥橋料亭②			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					飛鳥橋料亭その二①			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					飛鳥橋料亭その二②			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					入谷庚申堂前			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					金杉安楽寺観音堂前			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					根岸の里 臨慮庵入口正面			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					正徳寺庭			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					二軒茶屋前			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					深川木場(材木屋横建屋)①			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					深川木場(材木屋横建屋)②			
1831(天保1)-1	江戸名所図会					芭蕉庵			
1834年(天保5)	愚翁二葉草						香脱石も本町場		
1840(天保11)	堅田図			正面縁一板(入口)					
1842(天保13)	家範雜考		南庭を得て直に寝殿		南庭を得て直に香解を昇り				
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					桜天満宮			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					桜天満宮			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					桜天満宮			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					桜天満宮			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					性高院(朝鮮国使者)			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					静雪楼			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					潮地頭			
1844(天保15)	尾張名所図会(前編)					義朝最後			
1849(嘉永2)	善光寺名所図会					庫入口一自然			
1849(嘉永2)	善光寺名所図会					静女旅宿			
1849(嘉永2)	善光寺名所図会					上田大宮			
1849(嘉永2)	善光寺名所図会					白鳥社			
18C初	絵本江戸十産					竜岩寺庭一縁一方形単独			
18C初	絵本江戸十産					十條の里 縁一方形単独			
18C初	絵本江戸十産					染井植木屋 縁一方形			
18C初	絵本江戸十産					染井植木屋 縁一方形単独②			
18C初	絵本江戸十産					印子坂 縁一方形単独			
18C初	絵本江戸十産					青山梅之 縁一方形一飛石			
	262	35	3	19	1	200	15	18	8
1909(明治42)	庭園図説					須野式の庭	飛石は香脱を下りて…(平面には飛石あるが香脱はなし)		
1909(明治42)	庭園図説					田園式の庭	飛石は縁先きの踏段から二、三の石…(平面に飛石あるが香脱なし)		
1909(明治42)	庭園図説					二重櫓の庭	飛石は香脱の先…(平面に飛石あるが香脱はない)		
1909(明治42)	庭園図説					洒落なる庭	文字に香脱ないが絵図に描かれる自然石		
1909(明治42)	庭園図説					萩の庭	自然石の香脱あたりの様が亦ことに良い。(平面にも絵にも姿なし)		

Research on shoe-removing equipment (Kutsunugi) seen in historical materials.

In this paper, focused on the importance of certain space between inside and outside. I especially pay attention to the object which is called Kutsunugi-Ishi or a shoe-removing stone. First of all, I examined its transition in historical materials. We could find three types of Kutsunugi or the place where people take off their shoes; 1) stone(s), 2) wooden board(s) 3) certain space itself not an object.

There also exists Kutsunugi-Ishi at the entrance of a tea ceremony house as the name of Nijiriagari-Fumidan-Ishi.

Wooden Kutsunugi is also called Kutsunugi-Ita or a shoe-removing board and can be seen in the materials of the end of Heian-Era(794-1192). We can see the image in the paintings of Syotokutaisi-Eden in 1069 as well as the word of Kutsunugi-Ita, in the documents in Mibuke-Komonjo written in 1176.

The image of current style of Kutsunugi-Ishi can be found in the paintings of Ippen-Syonin-Eden in 1299 while the Kutsunugi-Ishi can't be seen until the end of Edo Era. We can first find the name of Kutsunugi-Ishi in Ishigumisonouyaegakiden written in 1827. Kutsunugi-Ishi was also called in various ways there, such as Fumidan-Ishi or Ichino-Ishi in Tsukiyamasenshiroku written in 1797.

Therefore, we can say that Kutsunugi-Ishi had been called differently before that name. However, in Chafu or Rojikikigaki of tea materials, Kutsunugi-Ishi was named a Nijiriagarino-Ishi etc. We could know it was used as the place of Kutsunugi or removing shoes on.

Also, look at a list, while a number of paintings of Kutsunugi-Ita can be found before Edo Era, the number was decreasing after Edo Era instead of emerging those of Kutsunugi-Ishi. We found that the mainstream, may have changed since the Edo Era. It is possible to say that Kutsunugi-Ishi already existed in Kamakura Era. But it had not been the uniformity name till the late Edo Era, and they called different names.

I would like to work on further studies of the relationship between Kutsunugi-Ishi and tea ceremony rooms, as well as other architectural style houses such as Shindenzukuri-style or other private houses. I also would like to study how it has been transformed. (Word count 357.)

Seiichiro Yamazawa